

てのひら

掌の小説Ⅲ

パエストウムの壁画 愛情テスト 服と人間

極小サッカー 時代劇 縁台・将棋A I

カメ 海紅豆ふたたび

神野麻郎

パエストウムの壁画

香田真樹こうだまきという若者の調子がこのごろおかしい、と聞いた。証言はいくつかある。まず恋人の米谷里香よねたにりかはこんなふう言っている。

「どうも地方への出張から帰ってから、彼、変なんです。いつしよにお食事してもどこかうつろです。いつものように生き生きした澄んだ目で私を見てくれません。私が何かしゃべってもいいかげんな返事で、私の話は半分も耳に入らない感じですよ。ぼおっとして心ここにあらずといったようなんです。電話をしてもなかなか出てくれなくなりました。メールも返信がひどく遅いのです。今までつき合ってきた中で、こんなことは一度もなかったのに。いきっと出張先か、移動途中かで何かあったにちがいないと思うんです。すごく恐ろしい目にあったか、それとも反対にすっかり心を奪われてしまうような魅力的なものにふれたか。私が怖れ、疑っているのは後のほうです。彼は美術が趣味で、美しいものに人一倍敏感なのです。旅先ですごくきれいで魅力的な女性に出会って魂を奪われてしまったのではないか、そう思えてならないんです。だから私、居ても立ってもいられないんです」

職場の同僚で友人の岡悟志はこんなふう言っている。

「ええ、そうですね。あの出張から帰って以来、彼は別人のようになってしまいました。いえ、取引先との交渉でトラブルがあったとは聞いていません。本来、メールとビデオ会話でのやり取りでもすませられるような簡単な用件だったのですが、顔つなぎということでも上司がわざわざ彼を取引先まで行かせたのです。休日をはさんで週をまたぎましたが、ふだん忙しい彼にはよい骨休めになるはず、ゆつくり観光でもしてこい、そう言っただけなのに彼は彼を送り出したんです。ところが帰って出社してくるとあのようですよ。まるで魂を抜かれたようで。どうしたんだ、何があったんだと問いただしたんですが、ふだんの彼に似合わず目をそらしてはかばかしく答えません。きっと出張中に何かショッキングなことがあったんですよ。それが何かは不明ですが。仕事にもならないので、上司も私たちもしばらく家で休むように勧めたんです。急ぎの用件はテレワークでもできますからね。でももう有給休暇

をとって五日目ですが、彼からはまだ何の連絡もありませんね」

だが、母親の香田節子はこんなふうに言っている。

「たしかにあの子は出張から帰って以来急に変になったのですが、思い返すと以前から兆候はあったように思うんです。昔から弱音を吐かない子で、それに親思いなので、楽しそうに仕事をこなしているように家族には見せていましたが、やっぱりハードな仕事の疲れがしだいに溜まってピークに達していたんじゃないかと思うんですよ。それに里香さんに対しても、忙しい中で時間を作って会ったり電話したり、何かと気を遣ってたでしょ。やさしい子なんです。ええ、過労による自律神経失調じゃないかと私は見てるんですよ。夫も同意見です。親だからこそわかるんですが、子供の時分からなにごとも積極的に取り組んで活発なようですが、実は繊細なところのある子なんです。それで、二人で神経内科の受診を勧めたんです。本人はそんなんじゃないと言い張るんですが、昨日やっと駅近くの医院に行ってくれました。でもその診察の結果が、すぐには先生にもよくわからないというんですよ。続けて通うように言われたそうなんですが、本人はもう行きたくないというので困っています。もっと悪くならないかと心配ですよ」

そこで私は彼が受診したという精神科医のところにも聞きに行った。医師には当然クライアントについての守秘義務があるが、私は彼の縁者をよそおいつつ、ちよつと催眠術を使って医師のその自製の部分を解いてやった。すると元来がしゃべり好きらしい精神科医はこんなふうに話した。

「まだ一回しか診ていないので診断はつきかねます。ただ、特徴的なのは彼の時間や空間の認識がだいぶ揺らいでいることです。クライアントの中にはたまに、今は西暦何年ですか？とか、ここはどこですか？とわれわれに訊いてくる人がおります。昨日の彼もまさにそうでした。そうした場合、医師はすぐには答えを言わず、あなたは今が何年だと思えますか？ここはどこだと思いますか？と反問します。彼の答えはちよつと風変わりでした。時は、よくわからないがキリスト暦よりもだいぶ以前、そしてここはナポリの近郊ですね、と言うのです。ええ、訊き返してみると、あのイタリアのナポリなんです。ではあなたは自分を誰だと思えますか？と次の質問を試みましたが、少し間があつて、香田真樹です、と答えました。ですが、その間のあいだに心の中で葛藤があつたようです。そうです、あなたは香田真樹さんですよ、今は西暦何年でここはどこそこ、と私が説明すると、「ああ、そうでしたね」と彼もいちおうは応じましたが、どこか腑に落ちないようでした。

もう一つ印象深かったのは、彼が非常に死というものを恐れている、ということでした。二人の間で人間の生死が話題になった時に強い反応があつて、「ぼくはもつとこの世に生きていたい」といささか感情を昂らせて言いました。「川の水が怖い」とも言うので私も驚いたのですが、彼はいつか川か海かで溺れかけた体験をして、その恐怖がトラウマとして残っているのかもしれない。

時間や空間、また自己の認識が揺らいでいるという傾向、それから強い死への恐怖心という二つのことは、彼の自我が今危機に瀕しているということを示唆している、と今のところ私は考えています。彼の無意識の領域に何らかの強いコンプレックスが潜在していて、それが身の回りで起こった何かのできごとをきっかけに発現して、自我、つまり意識の危機的状況を招来したのかもしれない。そのコンプレックスが幼児期からのものなのか、それともそれよりもっと深い無意識にかかわるものなのかはまだわかりません。この種の精神疾患の内実は、定期的に通っていただけで何度か問診してみないとよくわからないものなのですよ。彼の無意識を探るために、彼には毎夜見る夢を記録するよう言いました。

そう、今までの私の話で、彼に親しい方として、何かお気づきになることはありませんか？ たとえば彼は子供の時に川で溺れかけたことがある、とか、イタリア旅行が好きだとか

「やっぱりそうだ、まちがいない、と私は判じた。私はこれから彼のもとに行って、彼にかかった魔法、一種の呪い^{のろ}を、解いてやらねばなるまい。

医師の見立てとは少し違って、彼の心は、ほんとうはこんなふうに言いたいのにちがいない。

「珍しく出張の間に休日が二日ありました。一日はお得意先のゴルフにつき合わされたのですが、もう一日はフリーで、ぼくは多少美術に興味を持つので以前から参観したかったその地にある有名な美術館を初めて訪ねてみたのです。緑の木立に囲まれた立派な美術館でしたが、参観客は少な目でした。ゆっくり鑑賞してまわっていた途中で、ぼくは運命の絵に出会ってしまったのです。出会うべくして出会ったという気がしました。それは何かといえば、イタリアのパエストウムという遺跡から発掘された「飛び込む男の絵」です。身体が震えるような、底深い衝撃を受けました。

ええ、パエストウムの「飛び込む男の絵」は美術の本で見ても、以前から知っていました。一人の裸の男が、あの飛び込み競技の選手のように水に向かってダイブしている図柄です。何か心引かれるふしぎな絵だなと思っていました。美術館の絵はもちろん壁画の複製だったのですが、非常に精巧にできていました。解説文によれば、パエストウムはナポリの南東にある紀元前七世紀ごろに建設された古代ギリシャの植民市で、このフレスコ画は紀元前五世紀ごろの墓の石棺の蓋の内側に描かれている、墓の被葬者は若い男性、などなど。

気になっていたなつかしいものに再会した気分です、あらためて私は絵に見入りました。全体に白っぽい絵の、画面構成はかなり単純で、筆致も素朴なマンガに似ています。黒いやわらかな線の四角い縁取りがある画面の下部のまん中に、盛り上がっている青い水が描かれています。盛り上がりは逆巻く波を表しているように見えるのですが、解説によるとそれは川、この世とあの世を隔てているいわば三途の川だと見られているそうです。ギリシャ神話でいえば、この世の果てのオーケアノスの海流にあたるのでしょうか。その川に向かって今

や一糸もまとわぬ褐色の皮膚の、体格のよい若者が空中で逆さまになってダイブしています。男の右側には白いレンガ積み飛び込み台のような壁が描かれていますが、それはこの世とあの世との境界を示すのでしょう。壁の右側、画面の右端には大きな海藻のようなかたちの茶色の樹木が一本斜めに伸びています。この世のシンボルなのでしょうか。同様の樹木はもう一本、画面の左側、川のそばに描かれています。冥府のシンボルなのでしょうか。以上が描かれているもののすべてで、あとは縁取りの中に広く取られた白い漆喰の空間です。一見するともう目が離せなくなつて、ぼくはその絵の前に二時間も立ちつくしてしまいました。変にぼうつとしてきて、これではいけないといったん離れて他の作品をいくつかは見て回ったのですが、すぐに磁石に吸われるようにまたその絵に引き寄せられ、結局閉館の時刻までその前を離れられなかったのです。

心惹かれた一つの理由は、その逆さまになって飛び込んでいる男の精悍な身体つきとその直線に伸びた姿勢です。古代ギリシヤ人たちは「若くて美しいこと」を人間の最上の幸福だと考えていたと何かで読んだことがあります。彼もそうした青年の一人として描かれたのでしょうか。被葬者の男が写されたのでしょうか。美術の教科書にも載っている、あのデルフォイから出土した著名な「戦車御者像」の精悍な美青年と共通するものがあります。もしその絵の主人公が老いさらばえた男であったならば、その絵の芸術的な魅力は半減したことでしょう。

ダイブする人の絵柄は珍しいので、おのずと奈良の法隆寺の「玉虫の厨子」の「捨身飼虎図」が連想されました。あれは釈迦如来の前世の姿の王子が、飢えた虎の母子に身投げして自分の身体を餌として与える図でした。異時同図法で描かれていて、まん中あたりで王子が崖の下の方に向かって腰布をなびかせながらダイブしています。もちろん墓に描かれた「飛び込む男の絵」と伝伝を描いた「捨身飼虎図」とではモチーフがまったくちがうわけですが、死へのダイビングという点では共通しています。宙に浮かぶ男のよく伸びた身体の姿勢も似ているところがあります。

若い男の腕は斜め下に伸び、脚は斜め上に伸びた身体は川に飛び込むことにためらいなく少しもなく、飛び込み競技の選手のように非常に意志的な感じですが。胸から上は少し反らして、視線は川の岸辺から奥の方に向いているようです。そう思った時、なぜ彼はこんなふうな恐怖の色もなく颯爽と三途の川に飛び込んでいけるのか、ということが気になってきました。つまり今まさに死にゆこうとしているのに、恐怖心に襲われないのかと。

その疑問についてはこんなふうな考えられました。ぼくの勝手な想像にすぎませんが、これは彼を葬った人々の願望を表しているのではないかと。死者は棺に横たわって、蓋石の内側に描かれたこの絵に正対するわけで、つまりこの絵のように、死せる魂よ、この世に迷うことなく、果敢に川に飛び込み、すみやかにあの世に行けよと励ましているのではないのでしょうか。この石棺の遺骸を取り囲む側面の内側には何人もの青年たちが寝台にくつろいで

楽し気に宴をしているようすが描かれています。それは死者の生前の経験の追憶というよりは、あの世の理想を描き、死者を慰めているのではないかと思えるのです。飛び込め、そうすればこんなすばらしい安楽世界の暮らしが待っているぞ、と。でも当時の彼らにとっても理想は理想にすぎず、現実の死は陰惨であり、このうえない恐怖だったのではないでしょうか。だからこそ願望や理想を描く必要があった。

そのように思い至ると、ぼくの目に「飛び込む男」はまたちがったふうに見えてきました。颯爽としているようでも、実は彼は（あるいは被葬者の彼は）死が無性に怖いのではないか。逆巻く波の川は死の淵で、彼の目にはとてつもない恐怖の色が浮かんでいるはずだ。褐色の精悍な肉体は実は滅びの寸前なのだ。身体は震え、心も縮みあがっているにちがいない。「玉虫の厨子」の捨身する王子のような静穏はどこにもありはしない。

そんなことを思いふけりながらあまりに見続けたせいでしょうか、どうやらぼくは絵に魅入られてしまったようです。ふと時空が融解したような感じになって絵の世界がぼくに迫ってきたのです。ぼくは「鏡の国のアリス」のアリスのように絵の中に取り込まれ、そして彼自身に同化したのです。逆さまになって宙に浮かぶぼくの視野には奔騰する川の向こうにあの世が見えます。耳には恐ろしい波音が轟き、裸の皮膚は死の国から吹いてくる冷たい風に粟だつて凍えそうです。そしてぼくの心は、いや、魂は、恐怖心を突き抜け、ダイバーが海の薄暗い深みを目指すように今まで感じたことがないほどの薄暗い深みに下りていきます。そしてやがて底のような所に着地してあたりを見回し、何かを見つめます。いや、そこにたたずむぼくは、逆に何かに見つめられ、取り込まれようとしています。その何かとは、説明しがたいのですが、究極のもの、巨大な渦巻き、あるいは暗黒そのものです。

この一種の幻覚はしばらく続きました。そしてその状態からいちおう醒めた時、ぼくはもう以前のぼくには戻れなくなっていました。どうしたわけか、周囲がまるで変わって見え、感じられてしまうのです。身の回りの家族も恋人も同僚も会社の仕事も、今まで大事に思ってきたものすべてがかすみがかっていて、リアリティーに乏しいのです。現代という時代さえ、ほんの一時のはかないものにすぎないと思えます。これはもしかすると「飛び込む男」がぼくに憑依して、ぼくは彼の目でこの世界を眺めているのかもしれない。そしてもう一つ、非常に困り、悩ましいのは頭の中にひびいている奇妙な声です。「若さは楽し、なれど誰も彼も束の間にして土となるのみ」、「汝飛ぶべし、奈落の底に向かつて」、「暗黒のみが真実なり、他はすべて世迷言」、「こんなあの「ルバイヤート」の中にもありそうな箴言めいた言葉が常にぼくの頭を去来するのです……」

私は少し時間を要したが彼を探しあてた。彼は夜の間に自宅からあくがれ出て、だいぶ離れた大きな川の橋の上に立っていた。手足も身体も見るからにぶるぶる震えていたが、目は一心に暗い川面を見つめ、今にも川にダイブしそうな気配だった。私はそっと近づき、一瞬で彼にかかった一種の魔法を解いてやった。彼は我に返り、きよるきよるとあたりを見回し

た。私はすぐに彼から離れた。その後の彼のことは知らない。知る必要もない。彼にも私の記憶は残らないだろう。

そういうあなた、「私」、はいったい誰かって？ 私はまあ、パエストウムの「飛び込む男」の墓の番人のような者、あるいは芸術を愛する天使だ、とでも言っておこう。いつの時代も世界中に時々、あの壁画に魅入られて彼と同じような症状に陥る若者が出るので、こうして気をつけて世界を巡回しているというわけだ。幸い彼は救ってやれたが、あまりに深く「飛び込む男」に魅入られてしまっついに魔法の解けなかつた者たちもたくさんいる。でもまあ、私のように長い時代広い世界の無数の人間たちを眺めてくるとよくわかるのだが、「飛び込む男」の方が魔法なのか、それともある時代ある場所の観念や制度にどっぷり浸かりながら生きていること自体が一種の魔法にかかった状態なのかは、実は何とも言えないのだ……。

愛情テスト

最近隣の市のウォーターフロントにアミューズメントパークができ、若者の間でかなりの人気だということで、ぼくとセイラは休日にいっしょに出かけた。

お伽の国のような建物が散らばっている園内はかなり混雑して行列があちこちにできていた。ぼくも行列に並んでいくつかのアトラクションを楽しみ、カフェテラスでお茶を飲んだ。空気は清涼で、ウロコ雲を刷いた秋の空は瑠璃色だ。

人の流れとは少し離れてぶらぶら歩いていると、一隅に定番の「お化け屋敷」があり、そこは空いていた。ぼくは久しぶりに入って見たかったのだがセイラが嫌がった。でも彼女は隣の建物に、「バーチャル愛情研究所」という風変わりな名の看板がかかっているのを目を止めた。「あなたの愛、ほんもの？ バーチャルでカップル様の愛情テストいたします」と添えてある。そこも人少なだった。入場料は一人十ドルと少々高め。外観をあらためて見直すと、教会のようなフォルムに造ってあり、ピンク色の壁にはアダムとイブらしいポップな絵が描いてあったりしてちよつといかがわしい感じもする。

「どうせつまらない占いの類いだよ。やめとこう」とぼくは通り過ぎそうとしたのだが、セイラは、

「おもしろそうじゃない。あたし、「愛情テスト」というのを受けてみたいわ。あなたとい

っしょに」と乗り気で、結局お金を払って入ってみることになった。入口で氏名も書かされたが、これは仮名でもよいことなので、二人とも笑いながら適当に書いた。セイラはアフロディテ、ぼくはポセイドーン。

中のエントランスは高級ホテルのように意外に明るく上品な感じで、生身の人はおらず、上半身だけのアンドロイドのガイド嬢が笑顔でおじぎして説明を始めた。

「いらっしやいませ。「バーチャル愛情研究所」へようこそ。当「バーチャル愛情研究所」には四つの部屋がございまして、四つの愛情テストを実施いたします。テスト中のお客様方のごようすやおふるまいをコンピューターが観察し、点数化して、最後に成績表をお渡しいたします。といつても、固くならず、どうぞお気楽に、ゲームだと思つてなさってください。それでは、中にはお客様方だけでお進みください。ただ、一度ご入室なさらしたら引き返すことはできません。なおまた、このテストの結果、お客様方の関係になにか変化が起こったとしても、当方としては責任は負いかねますので、悪しからず。願わくば、このテスト結果を、アダムとイブとが今後も愛情を育む糧になさってください」

なんだか、最後の方は外観には似合わない古くさい表現だ。

次にガイド嬢は、ゴーグルをそれぞれに手渡してくれながら、

「このVRゴーグルをおつけください。おつけになったらどうぞこちらからご入室ください」

ぼくらがちよつと重さのあるゴーグルをつけ、手をつないで入口に立つとドアが開いた。入ってみると青白い光の部屋で、隅の方が暗いので広さも奥行きもよくわからない。低く流れているのは波音のようだ。「ああこれは、隣のお化け屋敷みたいに突然にか怖いものが飛び出てきて脅かすのだな。それで男がどれだけ女を守れるか、試すのだな」くらいに私は一人合点した。

ところが一分くらいすると、突然景色が変わった。

ぼくらはどこかの海上に投げ出されている。波は荒くはないものの、うねりが寄せてくる。沈まないように立ち泳ぎするしかない。でもあまり泳げない隣のセイラはもがいている。ぼくは腋の下に軽く手を添えてやる。ふと気づくと、そばには板切れが一枚浮いている。すぐにぼくはセイラを促し、それにつかまらせた。といつても板切れは小さいので二人がつかまると沈んでしまう。セイラがつかまり、ぼくは立ち泳ぎを続けた。でもだんだん苦しくなってきた。少し落ち着いたセイラは、「あなたもつかまって」と言う。でも板切れに手をかけるとセイラが沈んでいく。ぼくはようやく状況を理解した。一人しか助からない、そういう設定なのだ。これがバーチャルであることは頭の中ではわかっているのだが、でも状況は十分リアルで、離脱するのは無理だった。夢だとわかっていても夢から離脱できないような感じだ。疲れ、身体も冷えてきて、意識が薄くなってきた。おのずと板切れに手が伸びていく……。

気づくと、ぼくらは二つ目の部屋の前に立っていた。服は濡れていない。ドアが左右に開くと、中はまん中に透明な隔てがあつて、男女左右に別れるように指示が書いてある。トイレットの前のようにセイラとうなずき合いながら別れて入っていくと、テーブルと椅子があつてお茶が用意され、静かな心地よい音楽が流れている。左手の部屋も同じような作りで、セイラが横顔を見せて坐つたのが透明な隔てを通して見える。何が始まるのかとあたりを見回しながら待っていると、二、三分して横手のドアからゆつくりと白っぽい衣装の若い女が入ってきた。ファッション雑誌から抜け出してきたような美女で、スタイルも抜群だ。VRゴーグルはつけていない。ぼくはずっと目が離せなかった。女はっこりほほえんでぼくに会釈し、テーブルの向かい側に坐つた。

「ポセイドンさん、初めまして。私はルーナと言います。ふふ、アンドロイドではなくて生身の人間ですよ。私、あなたをお待ちしていました。あなたが当研究所に入つて来られた時から、ぜひあなたと会つてお話ししたいと思つていたんです。どうですか？ これから私とつき合つていただけませんか？ 私、きつとあなたを幸せにできますよ」

非の打ちどころのない造作の顔が微笑んで齒並びのよい口からそう鈴を転がすような声がこぼれると、ボクはただもう舞い上がつてしまい、クラクラした。女からは陶酔を誘うような甘い香りも漂ってくる。「これはバーチャルにすぎない」とやはり頭の中ではわかつているものの、目の前の女は十分なりアリティーを備えている。この美女とつき合ったら、今までの地べたを這うような人生とはちがつて、もっと軽やかな異次元の幸福が手に入るかもしれない、などの空想に誘われてしまう。

「ええ、まあ、その……」とぼくはどもつてしまい、相手の視線がまぶしくて思わず目をそらした。すると隣の部屋ではセイラの前にめつたにいないようなすらつとしたイケメンが微笑んで坐っている。セイラも変に身体をねじったり揺らしたりして、ぼくと同じようにあたふたしているようだった。ぼくは上気しながら、

「その、ルーナさん、ぼくにはもう恋人がいるので……」とようやく一言しぼりだしたが、弱々しい声になつてしまった。

「ああ、お隣のあの方、アフロディテさんですね。お名前のようにとてもステキな方。でも、ポセイドンさん、ちよつと考えてみてほしいのです。たまたま今日、こうして私とあなたはここで出会いましたが、あなたはアフロディテさんにもいつかどこかで偶然出会われたわけでしょう。そのときの条件が少しちがつていれば、たとえばその朝携帯の電池切れで目覚ましが鳴らなかつたとか、教授がひどい風邪をひいて授業が休講になつたとか、ですね、そうしたらその出会いはなかつたかもしれないし、あるいは別の方に出会つていたかもしれませんわ。男と女の出会いとかつき合いとかはそんなものですよ？ 今日、あなたと私はいくつかの条件が重なつたから偶然ここでこうして出会えたのですわ。だから私とつき合つてもかまいませんわ。私、きつとあなたを幸せにしますわ」

ルーナというその女は、美しい瞳でぼくを見つめ、甘い声でそうささやき、そしてやわらかそうな白い手をテーブルの上に差し出した。

「ええ、ルーナさん、それはそうかもしれないけど、ぼくはやっぱり、その……」

ぼくはもうじつとしていられず、目を伏せて逃げだすか、それともその手を固く握るか、どちらかしてしまおうだろう……。

また意識が遠ざかり、気づくとぼくはセイラと並んで第三の部屋の前に立っていた。なんだかセイラの顔を見るのがためらわれ、セイラの方も同じように落ち着かず、ばつの悪い感じだった。たがいにゴーグルに隠れて目の表情がわからないのが救いだった。

ドアが開くと、いきなり喧騒が飛び込んできた。今度はかなり広いカジノの部屋で、たくさんの人々がゲームに興じている。ぼくとセイラもそこが初めてではないようで、もの慣れた感じでルーレットの席に近づいた。すると盤の近くに立っていた上品な身なりの白いあごひげを生やした紳士が、

「ちよつとあなたたち」とぼくらに話しかけてきた。

「今度は16だよ。見ていなさい」

ディーラーが盤に玉を投げ込むと、なんとぴたり、16に止まった。ぼくらは驚き、男はにやりとする。

「でもまだ信用できないでしょう。偶然かもしれないからね。もう一回、見ていなさい、今度は9」

球はたしかに9に止まった。ぼくらがあっけにとられていると、男はしたり顔で、

「ふしぎでしょう。でもぼくは未来が読めるんです。未来といってもほんの数分先までだがね。どうです、ぼくを信用しますか？ 信用するなら席についてぼくの言うとおりにベットしなさい。あなたがたを一生食いつぶぐれのない大金持ちにしてさしあげましょう」

そう言われてぼくは乗り気になった。なんだか急にアラビアンナイトの世界に迷い込んだみたいながら。男の言うとおりなら、手持ちの百ドルを一回シングルナンバーで賭ければ三千六百ドルになって返ってくる。その三千六百ドルをもう一回賭ければ三千六百×三千六百ドルが手に入る。それをさらにもう一回賭ければ……と欲深い想像に酔いそうになりながら、でも、と疑問がわいた。この男はそんなけつこうな予知能力を持っているのなら、なんで見ず知らずの他人にまで教えないで自分でやらないのか？

心得顔で男が言った。

「君の言いたいことはわかりますよ。ぼくは読心術も心得ているからね。どうして自分でやらないのか、でしょう？ かんたんなことです。ぼくには金銭欲というのがまるでないので。親が残してくれたのでほどほどに財産は持っていますかね。ギャンブルで儲けようとは思わないのです。もう一つの疑問は、どうしてぼくらに、ですね？ それも答えはかんたんです。ぼくはあなたたちに何千万ドルか儲けさせてあげます。いや、一億ドルでもいい。そ

の代わりに、このステキな女性を今すぐぼくにください」

なにを言うのかとぼくは向きになりかけたが、男はぼくらを交互に見ながら続けた。

「ぼくの言うとおりにするなら、あなた方は別れることになる。その代償に、お二人とも大金持ちになつて一生涯裕福に遊んで暮らせるのです。今の苦勞の多い仕事を老人になるまで何十年も続ける必要はなくなりませう。人生を楽しめる時はそう長くはないですよ。どうですか？ あとはあなた方の選択しだいです」

ぐるぐると頭の中がめぐった。たしかに今の職場では実務にも人間関係にも苦勞している、なのに報酬はたかがしれている。がまんしてこのままあくせくと働き続けても豊かな老後など望めそうにない。しかしここで一大決心すれば、大金持ちになれて、そんな苦痛や悩みからは一挙に解放されるのだ。でもセイラは？ 数千万ドルとセイラが天秤にかけられている。いったい愛情の値段はいくら？ そばのセイラを見ると、しかし意外なことに微笑み、うったえかけるようにぼくを見ている。「ねえ、そうしようか。私もいろいろ思うけど、結局そのほうがいいかもしれない。こんな大きなチャンスって、生涯に二度とないでしょう？」とそのゴーグルの目は語っているようだ。「いいの？」とぼくは短く訊いた。ゴーグルの顔ははつきりとうなずいた。途方もない金持ちになれる、一生好きなことだけをして遊んで暮らせるのだ、でもセイラを失う、セイラを……。ぼくはルーレットの席について。財布の百ドル札をチップに換えた。男が耳元で数字をささやく。テーブルの上のその数字の個所にチップを置いた。「ノーモアベット」。ホイールが回り始めた。ディーラーが玉を投げ込んだ。からからとホイールの中を転がる玉。長々と転がって、もうすぐ止まる。そのときぼくは思わず立ち上がって叫んだ、「でもセイラ、だめだよ、こんなのは！」……。

第四の部屋の前には、ホテルのマネージャーのような感じのスーツの男が立っていて一礼した。そして手にしたタブレットを見ながら、

「お客様方、ここまでお疲れさまでした。ここですわね、かんたんにも今までのテストの結果の中間報告をさせていただきます。結果は、お客様お二方とも百点満点中六十点をクリアされています。これは平均よりも高得点ですね。では最後の部屋にお入りください」

ドアを入ると小さなカフェのしつらえで、二組ほど先客が坐っている。ぼくらは壁際の空いた席に坐った。すぐにアンドロイドのウエイトレスがやってきて、テーブルに冷水のコップを置きながら、

「ようこそいらっしゃいました。ここでは軽食をお出ししますのでお召し上がりください。でも決まりが一つあります。それを守ってください。飲料は呑み込んでかまいませんが、口の中で咀嚼した食べ物は、呑み込まずにこちらのお鉢の中にお出しください。よろしいでしょうか？」

妙ちくりんなことだったが、なにかの健康診断をするのだろうかと思った。やがてサンドウィッチとオレンジジュースが運ばれてきた。ぼくらは席に向き合い、ほとんど黙ってそれ

らを食べ、飲んだ。いや、食べ物、咀嚼し、横を向いて蓋のある鉢の中に吐き出した。やっぱり病院で尿検査かなにかのように健康診断を受けているような気分だった。

食べ終わったが、ぼくらはお互いの鉢を見ないようにして、早くかたづけしてくれるのを待っていた。ところがさっきのウェイトレスがやってきてこう言ったのだ。

「終わられましたね。では、お互いのお鉢を交換なさってください。そしてその中身をお召し上がりください。今度は呑み下してくださいさってけっこうです。さあ、そのスプーンでどうぞ」

ぼくらは二つの鉢を見た。そしてお互いを見た。途方に暮れた顔をセイラはしている。セイラの目に映るぼくの顔もそうだったろう。ゴーグルの目が迷っている。でもしかたなく鉢を手に持って交換した。ぼくは前に置かれた鉢の蓋をとって中身を見た。サンドイッチは咀嚼と唾液によって流動物状で、原型をとどめなかった。でもそれはセイラの口の中にあつたものでサンドイッチにまちがいないし、唾液はキスの時に何度も吸ったセイラの唾液にほかならない。だから汚くなんかないはずだ。でも汚かった。嘔吐の吐瀉物よりはましかもしれないが、でも口に入れたら戻してしまいそうだ。でも今、ぼくのセイラへの愛情が試されている。ぼくはなんでもないふうを取りつくり、セイラに笑いかけ、閉じないように目を見開き、自分を励ましてスプーンを持った。同じようにぎこちない笑顔のセイラもゆっくりとスプーンを持った……。口の中に入る直前、スプーンの中のもの甘いクリームに変わっていた。

セイラとは結局別れることになった。「愛情テスト」の結果がそれほど悪かったわけではない。「変なテストだったね、あれは低レベルの遊び、性質たちの悪いジョークにすぎないよ」と後で二人で言って笑い合った。でもぼくもセイラも、「愛情テスト」のために自分の「愛情」というものにいくらか自信をなくしたのはたしかだった。というより、限界を感じたというほうが正確か。あなたの「愛情」といっても、所詮その程度のものだよ、と「テスト」から突きつけられたような気がしたのだ。

でも、あの「テスト」で百点を取れる人間などこの世界にいるのだろうか？ 広い世界だから、それはいるだろうな。でも身近にはいそうもない。

服と人間

先生、自由に話せとおっしゃるから、とりとめもないことをしゃべりますよ。きつと呆れられると思いますが。私は統合失調症、昔の病名なら分裂病なんですか？ その疑いがあるかと？ 自分ではそうは思わないんですがね。

それというのがですね、何日か前の夕方、家族にいわれて自宅の風呂に入ったんですよ。二週間ぶりでした。その時、びっくりしました。変だと思ったんです。何がって、自分の身体が。皮膚に毛がないんですよ。つるつるなんです。四肢も胴体も。つくづく眺めました。こんなサル類がほかにいるか？ いない。このつるつるの皮膚のたよりないものが自分の身体だというのはどうもおかしい、こんなはずはなかったのにどうしてこうなってしまったんだらうと思いました。もちろん自分の身体だけではない、ヒトの身体というのはどうしてこうなってしまったんだらうと。先生も服を全部脱ぐような時、ふとこんな思いが頭をかすめることはありませんか。あるいは服を着ている自分と裸の自分と、どちらがほんとうの自分なんだと迷うようなことが。

朝、電車に乗ります。たくさん人が乗っています、いろいろな服を着てね。ふつう人は人を、裸ではなく服を着た存在として認識します。人に会ったとき、想像の中で一々着ているものを取り去ってその人の裸の姿を確認しようとするようなことは、性的な妄想がはたらく時以外はまずやりません。いちいちやっていたら変人ですよ。でも頭から人を服を着た存在とみなすという認識は、あきらかにまちがっています。だって服はその人の身体の一部ではないのですから。かんたん自明のことですよ。獣や鳥なんかとはちがって、下着にしても上着にしても身体に繊維で織りあげた物をただ着重ねているだけです。もしまちがいでいうのでなければ、ひどい錯覚ですね。ヤドカリを、貝がらといっしょにヤドカリと認識するようなものです。貝殻を取り去ったヤドカリのあの細い、たよりない身体が人の身体にあたるものです。

電車の人から服を取り去ってしまうと、見慣れない奇妙な光景です。でもその見慣れない奇妙な光景が、ほんとうの光景なんです。毛のないつるつるの皮膚をしたサルたちが、すました顔をして吊革につかまったり座席に腰かけたりしているのにちがいません。

オフィスに入っても同じことです。毛のない皮膚の上に、借り物の服をまとって、さも服が自分の身体の一部であるかのようにふるまい、与えられた仕事をしているのです。社長や役員たちはオーダーメイドの高価な服を着ているかもしれませぬ。でもいくら服のできがよくても借り物ほどこまでも借り物で、けっしてその人の身体の一部ではないのです。借り物を取りされば、つるつるの皮膚のサルでしかないのは皆同じです。

繁華街でも、毛のない裸のサルの群れが歩いています。駅前で政治家が車の上で演説して

いましたが、服を全部はぎ取ってみるとだいぶおかしい。友だちと食事してもバーに飲みに行っても同じことです。学校の教室を想像したりすると、かなりこっけいです。毛のない子供たちに向かって毛のないサル先生がもつともらしくなくなにか教えているわけですから。

こんな想像を、先生はナンセンスだと思われませんか？ ヒトの常識からすればナンセンスですが、でもサル類の常識からいえばまぎれもない真実にちがいありません。先生は白衣を着ておられる。でも白衣はどこまでも借り物に過ぎず、先生の生身の一部ではありません。先生も私も事実として毛のないサルどうし、今こうして向き合っているわけです。

唐突ですが、このごろテレビでやっている国会というのもおかしいですね。自分はひどい人物だと思いいこんでいる着衣のサルたちがえらそうに議論している。借り物にすぎない服を取ってやれば、まあ、動物園のサル山の風景とそう変わらないでしょう。ファッションショーなんか、この点から見るとじつにこっけい、いや、逆に楽しいですね。モデルは裸の身体に商品の服をとっかえひっかえまとして、最新流行をアピールしているわけです。それは化粧品や家電製品の宣伝となんら変わりません。

できるだけ余分な服を取り去って、裸に近い姿で動いている現代の人類は、スポーツ選手でしょうか。もちろん種目にもよりますが、陸上、水泳、レスリング、相撲などはユニフォームが小さいですね。なぜかといえば、服を着こんだら動きの邪魔になったり危険だったりするからです。積極的な意味では、露出を多くして鍛え上げられた筋肉の躍動を誇示しているのでもありましょう。スポーツは獣らしい行動や遊びの洗練されたものでしょうから、彼らが獣に近い姿でプレイするのは当然です。古代ギリシヤ時代のオリンピックは全裸で行ったらしいですが、それもしごく理にかなっていますよ。

先生、私、風呂に入ってから数日間、こんな思いにとらわれていますとね、じゃあ人類はいつからどんな理由で衣服をまとうようになったのかということがだんだん気になってきたんです。「起源」というのはいつもそのことからの本質をなんらかに孕んでいるでしょうからね。「衣服の起源」みたいな全人類的なテーマについては、きっと考古学や人類学や服飾学の分野でいろいろ学説があるだろうな、そうは思いましたが、だからといって図書館に行って本を調べるのはいかにもおっくう、ネットで調べるのさえもの憂い、というわけで結局自分の頭で考えてみることにしました。

考えだすと、しかしこれは思いのほか難問です。人間の基本的な生活を「衣食住」と三つ並べていますが、この三つの中で食と住の起源は、私も人間だからなんとなく見当がつきます。でも衣の起源はいちばん考えづらい。先生、そうは思われませんか？

人類がいつから服をまといはじめたのか、ということは見当もつきません。ホモサピエンスは三十万年前くらいにアフリカ大陸で誕生したというのが最近の説のようですが、誕生したてのころの人類はまだ服を着ていなかったでしょうし、まだ適度な体毛があつてその必要もなかったでしょう。

人類はどうして服をまといだしたのか。こちらのほうは少し見当をつけやすいですね。

まず防寒のため。アフリカで増殖した人類が、六、七万年くらい前でしようか、新しい土地と食糧を求めてアラビア半島を経由して大陸の各地へ移動した時、寒さ対策に毛皮か何かをまとうようになったというのはいくらもあつたでしょう。低緯度の地帯でも山や高原はあるし、昼夜の気温差もありますからね。これは実用的な理由です。

でもその前に、じつは遊びから服が発明されたのではないかと私は思っています。異性を誘引したり、自分を強く見せたりするために原始人は身体に塗料で模様を描いたり、骨や石や玉が素材の装飾品を身につけたりしたことでしょう。これには信仰上の理由もからんでいるかもしれません。そこまでならこれも実用の範囲なんです、ヒトはそこからさらに進んで、人より目立とうとして、あるいはそのこと自体がおもしろくなって、塗りや装飾品に凝っていったでしょう。いかにも脳を発達させたヒトのやりそうなことです。そうなるともう遊びの領域です。毛皮なども同じで、あれこれ切つて形を工夫したり、継ぎ合わせた、また人まねをしたりしているうちに、衣服の原型のようなものができ上がっていったんじゃないでしょうか。

それからもう一つ、局所を隠すということも、ある段階からはかなり重要な理由になったでしょう。局所を隠すということは逆に局所の強調であつて、異性を誘うわけです。これは現代のファッションの一部が自分の性的魅力のアピールを目的としているのと通じますね。今、先生も思い浮かべられたかもしれませんが、人類が局所を隠すようになったといえば、「創世記」のエデンの園の話がすぐに思い出されますね。神に食べてはいけないと禁じられていた善悪の木の果実を、蛇にそのかさかれてイブとアダムは食べてしまう、するとたがい裸でいるのが恥ずかしくなつてイチジクの葉っぱで局所を隠した、それが神の怒りにふれて二人は楽園を追放されてしまった。

あの話は、私の見方では、いわは精神的に人類の楽園追放をうまく語っていますが、衣服の発生という点でも参照に値します。毛皮ではなくイチジクの葉っぱですが、それはただシンボルということでしょう。局所を隠すことはかえつて局所に注目を集め、神秘化することになって、以来、ほかの動物には見られない、人類独特の性文化が発達することになりました。局所を覆うにはパンツ状やスカート状の衣服がいろいろ考案されることにもなつていったわけです。

そればかりでなく、あの話が秀逸なのは、衣服の発生と楽園追放とを関係づけて語っている点です。アダムとイブは生まれて以来ずっと全裸で暮らしていた。それが自然で当たり前だった。つまり人は本来裸で暮らし、それでこそ他の動物とともに楽園の一員でいられたんです。それを、人がまだサル仲間状態だったと置き換えてもよいかもしれません。サル時代の人間は、他の動物とともに楽園に暮らしていたのです。それが、一枚のイチジクの葉っぱをまといってしまったがために、つまり衣服が発生したために、墮落した人類は楽園を追

放され、以来ずっと苦役の人生を送ることになってしまったのです。

初めに私、人が人を服を着た存在として認識するという常識はまちがっている、または錯覚にすぎないといいましたね。その深い意味は今の点ですよ。本来人は裸だったのです。それが服を着る堕落したサルになったということですよ。

防寒か、遊びか、性的誘因か、またはその複合的な理由でか、人が服を着るようになって何千年か何万年かたつと、サルの種族として適度に豊かだった体毛がだんだん退化していき、とうとうもう獣（毛物）とはいえない、つるつるの皮膚の身体になってしまいました。いや産毛があるよ、頭髮も胸毛もあるよといっても、獣と比べてみてください、貧相で毛に覆われているとはとてもいえません。

人にとって服はどこまでも借り物なんです。人と服とは別ものです。ああ、先生はご存じでしょうか、人が三途の川を渡る時、川のほとりにいる奪衣婆だつえばに衣は全部はぎ取られてしまふそうですね。その衣は懸衣翁けんねおうという爺さんが受け取ってそばに立っている大樹に懸けられる、その樹の枝のしなりぐあいでの人間の生前の罪の軽重が計られるといわれています。あれもなかなか、人間にとつての衣服なるものの本質を突いている話ではありませんか。

衣のほうではなく、衣をはぎ取られた姿が人間そのものなんです。地獄絵で、地獄の各所に血を流してのたうっている人間たちは、皆裸ですよ。

極小サツカー

ドーンと音たてて日本地図にオレンジのビニールボールがぶちあたる。ドアが震え、日本列島も微妙に揺れる。「一点！」。

はねかえったオレンジボールは勢いで反対側の壁のそばのテレビ台のほうまで弾んでいく。小さな足がすぐに器用にそれを押さえ取り、次のシュートを狙う。前から大きな足が近づいて、そのオレンジを奪おうとするが、小さな足はそれを横にころがし、すばやく身体を間に入れて侵入を防ぎ、くるりと回転してまた、台所へと続く地図を貼ったドアに向けて足を振るが、オレンジは大きな足に当り、今度はピアノの下のほうにころがる。二人ともが追いかけるが、大きな足が先にオレンジを支配し、少し自分の側に引いて小刻みに左右にころがし、スキを見てシュートする。目指すゴールは玄関へと続くドア、しかし機敏な小さな足にじゃまされてオレンジは側面の本棚に当り、はねて今度はテレビ台に当たってころがる。ま

たそれを大きな足が拾って、身体をふれあいながら小さな身体の背後に出て、ゴールに流し込む。オレンジはドンと音をたてる。「二対一！」。

十一点マツチ。先はまだまだ長い。

小さな足は疲れを知らない。大きな足も負けじとボールに絡んでいくが、動き続けると息がはずんでしまうので、守勢に立つ時間を長くとする。いわばカウンター狙いだ。大人らしく肝は心得ていて、防ぎ、奪い取り、反撃する。でもおのずと小さな身体にぶつからないよう、小さな足をふみつけられないようには気をつけている。

点は取ったり取られたりが続く。「二対二……五対五」。ボールは部屋の至る所を転がり、宙を飛ぶ。ソファアの上を直線で飛んで板戸に当たって跳ね返り、反対側のピアノの上の仏壇をかすめてあやうく香炉の灰をぶちまけてしまいそうになる。勢いよくガラス戸に当たってガラスが悲鳴をあげる。時おり天井にもはねて、電気の傘を脅かす。

「六対七」。熱が入っていわば勝負の佳境だ。

なお元気な小さな足はボールを前にしっかりと据え、ゴールをめがけて力いっぱい蹴る。そのイメージは、地図の板戸を揺らし、そしてそれを突き破る。オレンジボールは短い台所を瞬く間に飛び抜け、家の外壁も鋼の玉のように打ち破り、外気の中に踊り出す。はるか遠くのほんとうのゴールを求めて、ペガサスのように駆け、街の上空を飛び抜け、海上にまで雄大な弧を描く。

しかし大きな足も黙ってはいない。イメージは、孫悟空のように空を先回りしてオレンジを中空でキャッチし、足もとに回収し、元の家に向けて蹴り返す。その速さといったらさすがで、たちまちオレンジは板間に戻り、そこでもう一度渾身の力で蹴れば、玄関への板戸などたやすく突き破り、玄関の戸も壊して外に飛び出し、緑の山の斜面を下からなぞりながら飛行体となつて越えていこうとする。

もちろん小さな足もそんなことに黙っているはずがない。イメージは、山頂の上で待ち構え、身体を器用に独楽のように回転し、また反転させながら飛んできたオレンジボールをボールキックで蹴り返す。するとオレンジは今度は貨物船などが浮かぶ海上はるかに向けて飛行機のように航跡をつくりながら空中を疾駆する。また空の奥の方で大きな足が待っているのはいうまでもなく、しばらく山上と海上に離れてオレンジを蹴り合う激しい応酬となる。

ついに「十対十」のイーブン。

そのころにはしかし、さすがに大きな足はもうだいたい動きが鈍り、見えないチューブの口で引き戻されるようにたよりなくもとの板間に戻る。そして蹴り損ね、ボールが背後にこぼれてしまう。それを山を下り走ってきてなお衰えを知らない小さな足は見逃さず、果敢にさっと近づき、思いきり足を振り抜く。地図の日本列島がまたもドーンと大きな音とともに震え、破れてボールは空のかなたに抜けていく。

「やったー!」、五歳は坊主頭も顔も汗で光っている。七十歳もTシャツをぐしょぐしょに濡らしている。九月なかばの午後の光が、網戸を透かして床板に長い足を伸ばしている。

時代劇

与えられた役柄はまたしても「その他大勢」の斬られ役だが、今回はセリフが少しあって、名も「蠟山新助」とそれなりのものが与えられている。遅刻は厳禁なので、二時間以上も前に撮影所の会館に入って衣裳を合わせ、メイク室の鏡の前にすわる。同じように並んだ端役たちの間をメイクさんがせわしく動き回り、油や脂粉が匂う。脂粉は灯りの下の空気中にもほこりに混じって浮遊している。

台本のおおよその筋立てを頭で反芻して、自分の役どころをたしかめる。「蠟山新助」と名前はあるが決して目立たない端役の侍。代官に仕える家来の一人ということだが、「蠟山新助」、いったいどんな男なんだろう。もし「蠟山新助」の立場で内側からドラマを眺めるなら、こんなふうにもなるだろうか。

旧暦二月のある朝、朝食の時、今日は非番ですることもないので近くの大池に釣りにでも出てみようと思いついた。源五郎鮒か鯉くらい釣れるかもしれない。栄と小百合を伴ってもよいな。薄曇りの空だが、そろそろ花が開き、春の陽気も漂っている。そう二人に声をかけてみると二人とも声を上げて喜んだ。

裏の納屋で釣り道具を整えていると、表のほうで男のくぐもった声があった。放っておいたが、栄がすぐに対応に出たようだ。栄はすぐに家の中を通って、お屋敷からお使いが見えましたと知らせにきた。幼い小百合も母を追いかけてきて、廊下から「お客さま!」と父親に笑いかける。おかつぱの小さな顔がかわいらしい。すぐ表に回ると、尻をはしよった太市爺さんが足踏みしながら一礼して、

「お代官様のお呼び出しです。すぐにお屋敷へいらしてください」という。

「承わった」とうなずくと爺さんは「へーい」と答え、まだ他に回る所があるのだろう、せわしそうにすぐに踵を返した。膝が悪いので少しびっこを引いている。ふと、その背中にあたっている朝の光がなにやら不吉な感じがした。光は、去年の日の蝕の時のようにだいぶ赤味を帯びていた。

家族そろっての久しぶりの遠出が泡のように消えてしまい、栄は内心落胆しているはずだが、そぶりには見せず、泣き顔になりそうな小百合をうまくなだめている。栄に、「出るぞ」と言つて手伝わせてすばやく着物を着換え、脇差を差しこみ、打刀は手に持った。その間も、足もとに機嫌の直った小百合が笑顔でまつわつてきて、「とと様、お早いお帰りを」と一つ覚えの文句をいう。四つで、かわいい盛りだ。「おう、よしよし」と抱き上げ、いったんは固くなった新助の顔も思わずほころんだ。栄も、「ほんとうに、お早いお帰りを」と言つて笑う。常のことながら、その情にあふれた目つきが好ましい。

早足でお屋敷にかけつけてみると正門は開いたままで、門番が一札をして母屋のほうを手で示した。母屋のたまりの広間にはもう十人ばかりが集まり、なにか不時の大事が出来した時のようにたがいにわんわんとしゃべりあつてゐる。白い光の落ちている窓際に朋輩の戸村行之進と赤井琢磨が並んですわつていたので近寄ると、「おお、来たか新助」と座をあけてくれた。

「なんだ、どうしたのだ？」とすぐに訊いてみる。だが行之進も琢磨も、

「それがのう」と言つて奇妙に顔を歪める。

「もしや、あれか？」

「そうだ、あれのようだ」

お屋敷からの帰り道に、あるうわさについて三人であれこれ話したのは、つい昨日のことだった。

そのうわさを耳にしたのは五日ほど前のことだ。三山葵之介みやまという者がお城下で評判になつてゐるという。なんでも、三山は先の將軍のご落胤とかで、この度は公家に嫁いだ姉君を見舞う京上りの旅の途中らしいが、三山には一つ、妙な性癖がある。通る先々の町や宿場で「ご政道を正す」の生きがいにしているらしいのだ。うわさによれば三山は若くて歌舞伎役者のような美貌で、しかもすこぶる劍の腕が立つ。それで世の女たちが騒ぐ。隣国のご城下でも、ある家老の家に乗りこんで不正を暴き、たちまち家老を退隠に追い込んだそうだし。その三山葵之介が街道を進んで近くの宿場まで来たというので、当地の代官は気が気でない。なんとかこの地を素通りしてくれないものかと願つてゐる、というのだった。

代官の榊豊前守は、蠟山新助たちから見れば、まあふつうの上司だ。賄賂をとつて私腹を肥やし、酒癖女癖の悪いところもあるが、それらがとくにひどいというわけではない。気分屋で理不尽に部下を手厳しく叱責することはあるが、反面情に厚いところもある。新助の祝言や子供の誕生の時にはやさしく声をかけてくれ、十分な祝儀ももらったことを新助はずっと忘れないでゐる。

控えの広間には新助のような手代のほかに中間も含め、ものものしく十数人が集まつた。代官自身は顔を見せなかつたが、代わりに側近の田宮が現れて、太い声で仁王立ちに皆にこう告げた。

「各々方に親方様のお達しを申しわたすからしかと聴き取るように。本件はなお調べの最中じゃが、本日、不埒な旅の者が親方様に難癖をつけてこの屋敷に押し入って来るやもしれぬという知らせがあった。よもやそんなことはあるまいと思うが、念のために皆に集まってもらった。とくに非番の者は苦勞なことじゃ。万一ことが出来た際には各々方の手を借りることになるから、そのつもりで準備して待機せよ。以上だ」

「不埒な者とは誰ですか？ うわさになっていいる三山葵之介ですか？」と問う者がいたが、「それは今は言えぬ。調べの最中じゃ」とだけ田宮は答えた。

起こらないかもしれないことに召集され、しかも長い時間待たされそうで、それから一同は手持ちぶさたをかこった。ある者たちは準備のつもりだろう、たすきがけをして庭に出、刀を振った。新助は行之進らとやはり三山葵之介のうわさをしていたが、隣の話が耳に入ってきた。しゃべっているのは新助らよりは少し年長の耳川で、姓のゆえではあるまいが、あちこちの人間の間を小鳥のように飛び回って話を聞きまわるので、なにかにつけ代官所内外の人事や街道筋の事情に通じている。

耳川はこんなふうにするのだ。三山葵之介が乗りこんでくるとしたら、あのことを聞きかじつてのことにちがいない。あのことというのは、あれだ、木曾屋のことだ。これから始まる高井川の土手の工事を、いつもの尾張屋ではなく木曾屋に請け負わせることになったのは貴公たちも知っていよう。あれはおおよそ入札で尾張屋に決まっていたところに木曾屋が代官に大枚を贈って無理に更えさせたという話だ。おまけに代官は以前から尾張屋の末娘にご執心で、その女を妾にと所望していたのだが、尾張屋のほうはなかなかうんと言わない。それでお代官が腹いせに尾張屋から工事を奪り上げたそうさ。尾張屋は困って、ちょうどお城下に来ていた三山葵之介に窮状を訴えて頼み込んだ。もちろんあることないこと、自分に都合よくしゃべったにちがいない。それで三山はお代官の「不正」に憤ってわざわざこつちに足を向けてくるというわけだ。

ちようど今、尾張屋の末娘がお屋敷に来てお代官と会っている。おせいと言うのだが、出戻りの気性の強い女で、別にお代官から呼び出されたわけでもないのに、直談判しようとする分から押しかけてきたという。妾に迎えられるという話におせい自身はまんざらでもなく、条件次第ではということらしい。あの強欲な尾張屋のことだから、親子が仕組んでやっていることもかもわからぬ。押しかけられてお代官はちよつとたじたじだそうさ。

妙な話だと新助は思った。そういう話ならお代官も、尾張屋もその娘も、木曾屋も、みんなが欲得づくで動いているだけではないか。いつもの風景だ。そこに一見さんの旅人にすぎない三山葵之介があまり事情もわからずに割って入ろうとしているというのは軽率すぎる。ただ、新助のような下つ端には、耳川の話がどこまでほんとうなのかはわからない。どうなっているのか、ともかく家来としてはお代官に命じられたとおりにもしもに備えて待機しているしかない。耳川によれば、三山葵之介は二、三の配下を従えていて、彼らが身をやつ

し、前もって町に潜入して代官所や木曾屋のことを調べ回っていたという。それも事実かどうかはわからない。

新助は代官所内で經理の役目を与えられ、たとえば百姓が納めてくる年貢米の数を数え、重さを計って帳簿につけている。蔵への出し入れも帳簿を片手に指示する。そのような自分の仕事を好んでいたし、誇りももっていた。数字そのものはウソをつかない。けれどもその数字はどこか上の方で微妙に操作されてしまうものでもある。かつて通った私塾の儒者先生の高邁な説教とはちがって、人間の欲得と利害がからむ世事にはウソが多いものだ、と若い新助にも否応なくしだいにわかるようになってきている。

なすこともなく、長い間待たされた。午の刻ごろには代官の差配で中食が出されたが粗末なものだった。その後新助と琢磨は、腹ごなしにもなるからと行之進に促されて庭に出て刀を振ってみた。三人はかつて少年のころから同じ町道場に通った仲だが、剣術に素質もあり身も入れた行之進が上達が早く、琢磨が次いで、身を入れなかった新助はいつも後れをとった。その上この日ごろは竹刀の素振りすら怠っているのです、当然腕はなまっています。真剣をずしりと重たく感じる。行之進の号令で刀を振っていると、すぐに汗が吹き出てきて息も上がった。

表のほうが騒がしくなったのは、寒気をやわらげた春の日がだいぶ傾いてからのことだった。表門のほうでざわめく気配がして、一、三怒鳴り声も響いてきた。代官付きの者があわただしく駆けて呼びに来て、すわと一同は立ち上がり、表門のほうへと急いだ。遅れまいとして新助も駆けつけてみると、すでに多くの者たちが庭や屋内に散らばっていて張りつめた空気を呼吸している。代官が取り巻きとともに表座敷の廊下に立って庭のほうに對している。なぜか、代官のそばには木曾屋も、尾張屋の娘もいる。庭中にはふつと景色が浮き上がるような感じで、白っぽい派手な着物に身をやつした若者が仁王立ちになって、なにやらわめいている。うわさの三山葵之介にちがいない。新助の目にはまず、風貌も態度も高慢ちきで鼻持ちならぬ若者と映った。彼のそばには従者らしき者たちが三人、そして尾張屋のオヤジもいた。三山葵之介の甲高い声が、途中から新助の耳に入ってきた。

「……賄賂を取って木曾屋と結託、実直な尾張屋を排除しようとした。あまつさえ尾張屋の娘おせいをかどわかし、わが物にせんとするとは何事か！ 卑劣なふるまいにもほどがある。よってこの三山葵之介、京上りの途中なれども当地の民の困難を見かね、ご政道を正さんとする。代官、木曾屋、罪を認めて尋常にお縄につけ！ さもなくばこの三山葵之介、この刀に掛けて貴公らを成敗いたす」

いったんその芝居めいた口上が終わった時、代官、木曾屋、それにおせいも口を開こうとした。それぞれに言いたいことがあったのだが、三山葵之介は自分の発した言葉に酔い、もう聴く耳なぞ持たぬという風情で、さっと抜刀した。白い小口のそれは自慢の逸物で、皆の注目を集めたいらしい。

「ご、誤解じゃ。話せばわかる!」、やっと代官が両手を持ち上げ抑えるようにして、葵之介に向かって怒鳴った。

「この期に及んで弁解か? ええい、聴く耳持たぬわ!」

「ど、どこに証拠があるというのじゃ!」

「証拠? おいおい、悪人は常に証拠、証拠と言いつてる。証拠ならほれ、貴公のそばにいるのは尾張屋の娘にちがいない。それが何よりの証拠じゃ」

おせいは何か言おうとしたが、さっきから歌舞伎役者にも見まがう葵之介の美麗ぶりに魂を抜かれていたので、日ごろの強気に似合わずもごもごもったただけだった。

代官は、「危ない!」と思った。何が危ないかといえは、誤解の上にせよ斬り合いにでもなれば、自分が、そして家来が傷つけられる。あるいは家来が葵之介を負傷させても、後で必ず上の方から厳しいお咎めを受けるにちがいない。構えを見たところ葵之介の剣術は隙だらけで大したことはない。大勢いる自分の家来が葵之介に深手を負わせてしまう可能性は十分にある。とっさにそう頭を回した代官はなんとかこの場を無事に収めたいという一念で、

「皆の者、この者たちを取り押さえよ! ただ斬つてはならぬぞ!」と叫んだ。

決して、「斬れ!」と言ったのではない。

ところが葵之介とその従者たちは、それを乱闘の合図と訊いたか、それぞれが刀か脇差を構えた。「悪人ども」との対峙、こんな場面をもう何度も経験してきているのか、そのようすがいかにももの慣れたふうだった。そして自分たちのほうから敵と見定めた近くの者に斬りかかっていった。いきなり斬りかかれた代官の配下たちはたまったものでなく、やはり抜刀して防ぐしかない。たちまち庭や廊下や座敷の中やのそこそこで、斬り合いが始まった。蠟山新助らにしてみれば、ほんとうに敵同士なのか、ほんとうに斬り合いまでせねばならぬのか、頭に霞がかかったように判然とはしないままに。

葵之介は強かった。というのも、家来たちにはこの男は先の將軍のご落胤、傷つけてはまずいという頭があるから、どうしても剣先はにぶる。それで相手をやりこめる葵之介の動きが際立って見えるのだ。葵之介もその従者たちも乱闘を楽しむように容赦はしない。自分の顔には「善」と書いてあり、相手の顔には「悪」の札がぶらさがっているというかのよう

に、めったやたらに刀を振り回して迷いが無い。

それでも戸村行之進ら腕におぼえのある家来たちは、鬨争本能を刺激され、果敢に彼らに向かっていた。腕におぼえない新助は自ずと腰が引けて防戦一方だった。庭のまん中で葵之介と行之進が刀を数合合わせているのが見えた。優劣は見えなかった。ところが葵之介の従者で敏捷なのが横から助太刀に入り、それに気を取られた瞬間、あえなく行之進は葵之介の刀に肩口を深々と斬られてしまった。行之進の身体はそばの燈籠を倒し、植込みの中にもんどりうった。ああとそれを見ていた新助も別の従者の小刀に脇腹を刺され、うずくまっ

た。

しばらくして——、地面に横たわった蠟山新助の目のはしに、頭から血を流している代官と木曾屋が首根っこを取り押さえられている光景が映った。あたりはもう静かで、闘いは終わったらしい。家来たちが何人も庭の上や廊下に倒れている。呻いている者もあればもうこっと切れた者もいるようだ。葵之介らは皆無事らしく、従者たちは葵之介を囲み、一件落着の面相で笑っている。中には尾張屋もその娘も混じっている。

自分の負った傷が死に至る深手なのかどうか、新助にはわからなかった。だが薄れていく意識の中で新助は思った。仮に代官が極悪人だとして、そうなら代官だけを斬るかひっ捕らえるかすればいいのだ、なにも自分たち家来を斬り殺したり、傷つけたりする必要は毫もないではないか。下侍であつてもわれわれ一人一人に人生があり、大事な家族がいるという単純な想像すらできないほど、奴らは頭が悪いのか、それとも見て見ぬふりをするのか。

なんとか頭をめぐらすと、少し先の倒れた燈籠のそばに行之進が仰向きに倒れている。血の海になっていて、おそらくもう助かるまい。奴にも妻女がいるのだ、三人も幼子がいてやがて四人目が生まれようとしているのだ。こんなくだらぬことで大事な父を失った後、その弱い者たちが路頭に迷い、一生の苦労を背負ってしまうのではないか。琢磨の姿は見えなかった。いちはやく斬り合いから逃れて行った数人の中に混じっていたかもしれない。しかしそうだとしても誰もそれを責められぬ。

いとしい栄と小百合の顔が浮かんだ。今朝の別れ際の姿だ。二人とも自分を見て笑っている……。

「カット!」。監督の指示で助監督がメガホンで大きな声を張り上げた。急にみな動きが止まり、空気がほっとゆるんだ。とともにくるくると時間が渦を巻き、現実が舞い戻った。「このシーンはここまでです」と助監督が告げると、「三山葵之介」ら主だった役者たちだけ残して、「蠟山新助」ら出番の終わった者たちは静かに引き取っていく。「蠟山新助」は、むつくと起き上がって着物のほこりをはたいた「戸村行之進」に、「どうだ、後で一杯」と誘われたが、「いや、今日は娘の誕生日でな。またな」と断った。

縁台・将棋A I

金曜日の夕方、作業所の前に古びた縁台を出して二人が将棋盤を囲んでいる。二人とも作業服のままだ。ごましお頭の社長の郷田がよく顔をしかめるのは、形勢が思わしくないらしい。対して若い従業員の津川のほうは余裕の表情だ。

路地に面しているの、徒歩や自転車で帰路につく顔見知りがたまに足を止めてのぞいていく。中には一言、二言、その金がこうだとか、王様があぶないとか、おせっかいに言い捨てていく傍目もいる。三軒先の作業所の機械が止まり、あたりは急に静かになった。するとすぐに週末の少々だれた、ふわっとした気分が湧き出して路地を占めた。夏至に近い頃で空気はなまぬるく、まだ明るい夕日が屋根や壁を這っている。

ちよっと手の止まった郷田が、視線は盤面に落としたままで、

「それにしても、ここ数年で将棋界もえらい変わったのう。テレビの将棋見とると、AIが一手ごとの形勢をパーセンテージで示すし、次の最善手や次善手まで教えてくれる。あんなちよっと前には想像もつかんことやったで」

津川が社長の顔をちらっと見てあいそよく、

「そうですね。観るほうは楽ですわ。自分で考えんでもAIが全部教えてくれますから」

「ほんで、今どき将棋の解説者というの、やりにくそうやなあ。昔のテレビやったら、視聴者は解説者の解説を、ほう、そんなもんか、さすがにプロは読みが深いとありがたく承ったもんやがなあ。今は神様みたいなAIがでんとしておるから、このごろ先生たち、あんまり自信なさそうやでえ」

「そら、プロの先生といえども逆立ちしてもAIにはかないませんからね。AI無視して自分の勝手な読みゆうとったら、視聴者にこの人弱いんやなあと思われかねんですからね」

津川は人のよさを見せてニコニコしてる。ふだんからそんなふうだから、社長や他の年配の従業員たちからもかわいがられている。二年前に田舎から出てきて、近所にアパートを借りて住んでいる。

「いつやったかなあ、将棋AIが名人を負かしたのは」

「たしか二〇一七年ですよ。将棋のシンギュラリティーやいうて、そのころ大きなニュースになりました」

「その頃は、もう人間より将棋AIが強くなったんやから、プロ棋士の存在意義がのうなつて、プロの将棋界は急速に衰えていくんかなあとワイなんかは思ってたがなあ」

「ええ、ぼくもそう思いました。でも、今のところはそうなってませんね。反対に将棋を観るファンが増えて、人気が上がってますよ。特に将棋ソフトで強くなった若い最強名人が現れたりしてますから」

「最強ゆうても、AIには勝てんやろ？」

「そらそうですけど……」

かがみこんでいる二人の頭に斜め上からだみ声が落ちてきた。

「皆、いんだんやな。あんたら、またへぼ将棋か。飽きんとようやるのう」

いつのまにか奥野が立っていた。一つ筋違いの通りにある小さな鋳物工場の社長で、郷田とは幼なじみだ。もう髪をなでつけてござっぱりしたなりをしているのは、飲みに行こうと誘いに来たのだろう。

「代わりましよか？」と津川が気をきかして立ちかけたが、

「ええねん、ええねん。ほっとけ」と洪面の郷田。さっきから指ししぶっている。

「ほう、だいぶやられてまんなあ、社長」

「うるさいわ。口だすなよ。出したら今日はおまえのおごりにするからな」

奥野は鼻で笑って、津川のほうに話しかける。

「あんた、まだ将棋覚えて二年ぐらいやゆうとったのに、このごろ急に腕上げたなあ」

奥野も将棋が趣味で、郷田とは長年碁敵こがたきならぬ将棋敵でもある。以前は駅前の雑居ビルにある将棋クラブの常連でもあったが、老舗のそのクラブも、極端に外出が控えられた新型コロナウイルスの流行期に閉鎖してしまった。

郷田が、

「そうや、この若いし、将棋教えてくれゆうからワイが教えたったんや。そやけどもう平手でこつちがかなわんようになったわ。将棋ソフトで勉強してるんやと」

「いや、勉強というほどのことは」と津川は頭をかく。

「このごろの子はみなそうらしいなあ。ワイもネット対局やったらもう年季が入っとるで。コロナの時期は外で遊べんもんやから、部屋にこもってようやったわ。お、あんた、もう詰んどるで」

「うるさいわ！ いや、そうか？」

郷田はあっさり負けてしまっって、津川は気をきかせて奥野に席を譲った。手脂ででかてかしている駒を肉厚の指が手早く並べながら奥野が、

「そやけど、将棋ソフトやAIが普及してから、将棋界もまるで変わったなあ」

郷田が、

「おう、今もそれをこの子とゆうとったところや。人間がAIにかなわんようになって、将棋はもうつまらんちゆうことになるんかなあと思たけどなあ」

津川はいったん奥に引っ込んだが、すぐに盆に紙コップの麦茶を二つ載せて戻ってきた。

「お、すまん。兄ちゃん、気が利くなあ」

合図もなしに勝負が始まったが、二人とも指す手は途中までえらく早い。ろくに敵陣も見ずに、慣れた駒組みを作っていく。数十手も進んだところで互いに手が止まった。奥野が、

「いや、そら、ならんやろ」

郷田がちらっと相手を見て、

「ならんて、なんの話や？」

「さっきの話や。AIのせいで将棋がもうつまらんものになるんちゃうかとゆう。あんな、こう考えてみ。ウサイン・ボルトの百メートルの世界記録は九秒五八や。ロボットのサイボーグ作ってな、いやもうできとるんかもしらんけど、そいつが百メートルを六秒フラットで走ったとするわな。そしたら、ほなもうあほらしからと、人間の百メートル競走なくなるか？ そやないやろ。あくまで、人間の中で最速ちゆうことに人は注目するんや。サイボーグの例出すまでもないで。そこらのワンコでも川原連れてって走らしたら、ボルトより早いといったばいおるやろ。あくまで、人間の中で一番ということに価値があるんやで」

「そういわれたらそやな。そやけどテレビ見とったら、妙なことになるで。AIがすぐに最善手を示すやろ。棋士は長い時間考える。視聴者はみなもう即座に最善手を知つとるのにな。極端にゆうたら、世の中でその盤面での最善手を知らんのは対局しとる棋士二人だけや。前にはなかった妙な風景やで」

「それはそうやな」と奥野。津川もうなずいている。

さっきからちよつとオタクっぽい眼鏡に長髪の青年が、自転車のペダルを停めて脇から将棋をのぞきこんでいる。その彼が、

「それについてはぼく、こう思うんですけどね」と口をはさんだ。三人とも彼のほうを見たが、見知らぬ青年だった。

「あ、ぼく長谷、いいます。この近所に住んでいます。しゃべってもいいですか？」

「おお。のぞいとるとこ見ると、あんたも好きなんやな。遠慮せんとゆうてみ」と奥野。「はい。今のお話、ぼく、おもしろいなって思っただけです。ぼくはこう思うんですよ。

将棋を見るのは推理小説読んだりサスペンスドラマ見たりするのと同じしょだなあと。まあ、テレビドラマでいうとしたら、視聴者をワクワクさせるのに、大きく分けて二つやり方があるでしょ。一つ目は、犯人を最後まで明かさないうり方。視聴者は主人公の刑事とか探偵とかといっしょになって、誰が犯人やろかとあれこれ思いながら見ます。そこがおもしろいですね。もちろんよくできたトリックや、主人公の天才的な謎解きにも感嘆しますけど。

まあ、「シャーロック・ホームズ」や「相棒」がこのタイプですね」

「ちよつと待った」と郷田。

「あんた、テレビドラマ関係の人？」

「いえいえ、まったく。まだ学生です。ちよつと将棋とか、ゲームにはまりすぎて目下留年中です」と長谷は頭をかくしぐさ。

「そうか。兄ちゃん、パチンコや賭け麻雀なんかにはまるよりはずっとええが、将棋もほどほどにせんとな。ほんで強いんかい」

「まあまあですけど、でも自分が指すより人の将棋を見るほうが好きなんです。観る将のほうです」

奥野がちよつと呆れたように長谷の顔を見上げたが、

「話が途中やな。ほんでドラマの推理がどうしたって？」

「はい。一つ目は今いきました、犯人を最後まで明かさないうり方。それで二つ目は、ドラマの初めにもう視聴者に事件現場を見せておくというやり方です。そうすると一つ目のタイプとは、視聴者のほうはまったくちがう見方になりますよね。つまり、視聴者は初めから犯人を知ってる。いわば全知の神みたいな立場ですよ。主人公の刑事とか探偵とかが調べたり推理したりしていくわけですが、その犯人捜しのプロセスを視聴者はそうやないとかさうやか、ちよつと余裕をもって楽しむわけです。これは安手のサスペンスドラマによくあるタイプです」

「サスペンスに限らず、時代劇の『水戸黄門』なんかもそうやな」と郷田。

「そうですね。ぼくはあまり見たことないけど、時代劇でも犯人の悪事を初めのほうに見せるのが多いんじゃないでしょうか。その初めに事件を見せておくやり方がなんで安手なんかというと、視聴者に楽をさせるからです。視聴者は犯人を知ってるわけですから、あまり自分の脳であれこれ考えなくてもいいわけで、安心して見てられます。高齢者向きともいえますね。さて一つ目と二つ目、みなさんはどっちがおもしろいですか？」

「なんや兄ちゃん、ややこしこと言い出しよったな。どっちがおもしろいかって？ そりやあどっちもおもしろいやろ。そやからどっちも放映されとるし、見る人もおる。そやけど、あんなの話、なんや将棋と関係ありそうやが、つながりが、も一つわからん。もうちよつとあんじよう説明してみ」と奥野。

「ええ。そうですね。まあ、早い話が、ドラマの犯人探しが将棋の最善手探しや形勢判断にあたります。つまり視聴者のほうから見たら、プロ棋士の将棋の観戦は、将棋AI以前は一つ目のタイプでした。その指し手が正解かどうか、どれくらいの手なのか、どっちが優勢かは視聴者には最後までわからない。そこをプロ棋士の解説者が上手に導いてくれたわけですよ。解説者はドラマの刑事や探偵にあたるわけで、大事な役回りでした。でも将棋AIが人間を超えてからは、将棋観戦はすっかり二つ目のタイプに変わりました。視聴者は初めから神みたいな視点を与えられて、最善手も形勢も知ってる。プレーヤーの棋士が最善手を指すかどうかを時にははらはらしながら見守っているわけです。犯人を知っていなながら、ドラマの主人公の犯人捜しをワクワクしながら見てるといっしょですね。一方解説者は将棋AIの助手みたいな立場に成り下がってしまいました。つまりですね、将棋AIの登場によって、視聴者の置かれた位置が一つ目から二つ目へ、百八十度、劇的に変わったわけですよ」

「うーん、なるほどいわれてみたら、そういうことやわな」

「ぼくなんか、昔のことあまり知りませんから比べられませんけど、将棋AI以前と以降、将棋番組の楽しみ方、変わってませんか？」

「そういわれたら」と郷田。

「前は棋士の指す手がええのか悪いのか、どっちが優勢なのか、どっちが勝つのか、最後まで

でようわからんと見とったなあ。わからんうちに勝負が終わることもあった。でも、考えたら、その容易にわからんところがある、プロの指す将棋の奥深さであったり醍醐味であったりもしたな。プロ棋士も、下から見上げるように雲の上の人に見えた、そんなふうに見とったなあ。ワイ、これでも小説好きでたまには純文学も読むんやけどな、読んでも何書いたあるのんかようわからんことがある。わからんけどなんや奥深そうや、味わいあるなあとは思う。プロの将棋もそれとちよつと似てる感じやったなあ」

奥野が、

「おまえが純文学か？　こらびつくりや。生まれて初めて聞いたで。まあそれは措いといてもな、昔の将棋の見方は、そうやな、こいつのいうとおりのやつた、そうやつた。けど将棋A I以降はたしかに変わったな。その、神様の位置いうのんか、最善手かどうかも形勢判断も、将棋A Iという神様が教えてくれるから誰にでもわかるんやもんな。なんや知らんうちに、みなが高い所に急に押し上げられた感じで、そこから勝負を見下ろしてような、くすぐつたい感じもあるなあ。雲の上を仰ぐどころか、指しとる棋士を見下ろして、あ、その手ちゃうで、またまちごうた、とかなんとか、弱い奴らがかつてにゆうとるんやからな。そやけどまたそこがおもしろい。けど、対局者も解説者も、棋士の先生たちには受難の時代なんやろなあ。ごまかしがきかんもんなあ」

郷田が、

「そうゆうたら、テレビの画面見とつて、次の一手を自分で考えてみよとせんようにもなつたな。そやつて、最善手から五番目の手くらいまで、パーセンテージつきで画面にパツと出てくるんやもんなあ。一介の素人が考える余地なんぞまったくない。努力放棄や。楽や。なるほど犯人捜しを考えんでもええ。「水戸黄門」やなあ」

奥野が、

「将棋観戦が、純文学ちよつて、大衆小説になったゆうことか？　妙な結論やで」

長谷が、

「その、「みなが高い所に急に押し上げられた感じ」とか、「努力放棄」とかですね。ぼくはそこに、じつは、怖さを感じてるんです。便利にわかりやすうはなつたけど、ぼくら、受け身の位置に置かれたんですね。そして将棋A Iが神様の位置にいて、視聴者を操っている、ある意味ではプロ棋士さえも操られているわけです。以前は将棋に神様はいなかった。いや、いるとしても目に見えないあこがれの存在だった。でも今は、将棋A Iが目に見える現実の神様です。もちろん将棋A Iもどんどん進化していて、二年前の将棋A Iは今年開発された将棋A Iにはてんでかなわない、というような意味では究極的ではないですが、でも人間から見たらどうしても神様の領域ですよ。それこそ百メートルを六秒フラットで走るみたい。ついこの間、将棋A Iという神様が急に降臨してきて、そして今や将棋というゲームの上に君臨してすべてを操る時代になったんですね。棋士も視聴者もその神様の前にひれ伏

すしかない。そこがぼくは怖いんですけどね。すごく怖い」

郷田が、奥野に「そろそろ」と目くばせして盤上の駒を崩した。長谷青年との話に気をとられて、手はさつきからいくばくも進んでいなかった。

「なんや、たいそうな話になってきたで。兄ちゃん、あんた、大丈夫か。ワシら、そろそろ終わりで。一杯飲みに行くんや。よかつたら、あんたもいっしょにどうや？」

「ありがとうございます。でもまたにさせてもらいます」

「そうか、ほなな。また寄ってや。今度は一番指そうや」

津川がてきばきと動いて将棋盤も縁台も片づけられ、三人は作業所へ入っていった。長谷もペダルを踏んでそこから立ち去り、作業所の前には気配だけが取り残された。しかし長谷は、自転車はどこかへ走らせながらまだも「も」一人でつぶやいている。

「将棋とこの世界とどこがちがうのか。同じ。単純と複雑の違いはあっても結局同じ。個々の人生も経済社会の諸活動も人類の歴史さえも一つの大きなゲームとも見なせる。それを未来はA Iが仕切る。もうそれは始まっている。知ってか知らずか、人間は受け身の位置に置かれる。楽だから自分で考えなくなる。受け身で適当な消費生活をあてがわれてほどほどに満足しながら一生を終わる。でもその不幸も、人口さえも、A Iが数量的に操作する。未来はA Iが仕切る。もう始まっている。怖ろしい！」

地球が規則正しく回って、長い夏の日もようやく暮れかけてきた。

カメ

散歩コースの途中に、二十坪くらいの池がある。その辺はある仏教系の施設の敷地で、近所では「道場」と呼ばれている。やがて森へと続くゆるい坂道の左右に、大きくはないがお堂や家が立ち、植栽も豊富な庭が広々として石灯籠なども見えるが、ちようど商家が商いをやめて仕舞屋となったように、先代の庵主が亡くなってからは景観はほぼそのままに、もうほとんど宗教活動は停止しているようだ。お堂には本尊も祀られているらしく、そこから時に木魚の音が聞こえてきたりもするが、ふつうの寺院のようには見えない。

道のすぐそばのゆるやかな矩形の池は、周囲や底面はセメントで固められ、道との隔てには石垣が組まれて水を堰き止めている。まわりに桜、楓、合歡、菖蒲、紫陽花などが植わっ

て池面にも映え、四季の情緒を醸している。昔風でおもしろいのは池への注水のしかたで、近くの森の中を流れる谷川から黒いホースを崖や溝に沿っておそらくは二百メートル以上も長々と這わせている。標高の落差を利用して時間をかけてそこをたどってきた清水は、敷地内の懸樋を通り石の鉢に受けられた後で、池の片端に据えられた一基の水車の上に落ちている。年代物らしい水車の輪は鉄製の直径二メートル余りのもので、すっかり赤さびが出ているがまだ回っている。今では想像もできにくいのが、この山の斜面一帯が大規模な高台の住宅地に開発される以前には、山から下るいくつかの谷川に菜種油を搾ったり製粉精米したりするための水車が数十基も掛かっていたらしく、道場の池はその名残りの一台らしい。結局水は、水車を回しながら池面に落ちていく。音立てて勢いのよい時もあれば、水道の蛇口程度のこともある。

池の中ほどには石組みの島があり、低木やシヨウブを生やし、陶製の家や動物のミニチュアなども置かれている。そして池中には色も模様もさまざまな鯉が十数匹泳ぎ、その同居人の風情で亀も二匹いる。いや、いた、ほんの十日ほど前までは。この土地に引越してきてからもう三十年近くも、私は犬を連れての散歩の途中でよく池の鯉や亀を眺めてきた。エサを携えていって撒いてやることも多かった。鯉も亀も水中から私の姿を認めるとゆっくり泳いで近寄ってきた。時には水面に浮いたエサを競って食べた。鯉にも個性があつて、はしこいのやおっとりしているのがいた。亀は人の動きや物音に敏感だが、岸で甲羅干しをしていたり水車の水を浴びていたり、悠々自適の大人のふうもあつた。冬場はどこかで冬眠して姿を見せず、水がぬるむとゆるりと現れた。

「まもなく、池は埋め立てるんですよ」と、道場を管理している主あるじの老人から突然聞いて驚いたのは、まだ梅雨の続いていた今月初めのことだった。その人は先代の養子にあたる人で、道場の一画に住まいながら家族を営み会社を勤め上げた人だが、夫婦とも年老いて広い道場の管理が大変になったと以前からこぼしていた。たしかに広い庭の草刈りやおびただしい落葉の処理だけでも大変そうだが、池の管理にも手がかかるようだ。老朽化した石垣はよく水洩れしてそのたびに補修が必要だし、谷川から長々と引いているホースが自然にいたんだり、猪に喰われたり、また去年の秋のようにいたずらで切られたりするたびに人を頼まねばならない。生き物のためには水量や水質の管理にも気を使う。主はあらためてそんなことを挙げながら、「管理が大変だね」と言った。生き物の行方が気になったが、鯉は知り合いの施設に引き取ってもらえることになり、近々人が引き取りに来る、亀も別の場所に移すことになっているという。

そう聞いた日から、私は池のそばを通るたび、名残りを惜しむような気持で日ごろ見慣れた鯉たち、亀たちを眺めるようになった。エサをやるうとしたが、ある日、「エサはやらな

い」と赤字で書かれた小さな札が石垣に掛けられていた。鯉は十日間くらい絶食しても生きていられる、新しい環境に早く慣れるためには今絶食しておくほうが鯉のためにはいい

のだそうだ。

そしてある朝、池が妙に静かだった。とうとう鯉たちが姿を消していた。自分のものではないながら、長年親しんだ。ペットを失ったような気になった。石の上で甲羅干しをしている残された二匹の亀も心なしか所在なげに見えた。鯉たちはもらわれていった新天地でどうしているだろうか。

鯉がいなくなってから、池の水位が少しずつ下がった。やがて埋め立てるのだからと主が考えてのことだろう。いつも音立てて水車から落ちていた水も細った。水位が半分くらいになると、藻や底の泥の黒さが目立つようになり、以前の清々とした感じではなくなった。そうした中でも二匹の亀を時々見かけた。気のせいかな、以前より二匹がいっしょにいることがふえたようだ。岸に並んでじっとしていたり、浅い所に甲羅を沈めて寄り添っていた。

二匹の亀だが種類はちがう。一匹は在来種のクサガメのようだが、もう一匹は眼の後ろのほうに赤い筋模様が入っているの、アカミミガメという渡来種かと思われた。どちらも大きく、甲羅の長さが二十センチ以上ある。二匹ともここ数年でだいぶ成長したように眺めていたが、どこからやってきてここに何年くらい住んでいるのかは知らない。もしかすると飼育しかねた誰かがいつかそっと池に離したのかもしれない。

池じゅうを見まわしても姿が見えない日には、もうどこかへ移されたのかと思ったが、鯉が引越してから十日間ほどが過ぎた朝、見ると池はもう土で埋め立てられて跡形もなかった。手前の一列の石垣は壊され、その石やセメントが瓦礫と化して散乱し、土の上には小型重機が主人顔で乗っていた。中島の石組みも破壊され、シヨウブの葉は下に埋もれ、上手の赤さび色の水車の輪とその支えは足払いの技を受けたかのように瓦礫の上に倒れていた。要するにもう池ではなく、瓦礫と土の現場に変わっていた。予想されたとはいえ、私にはつい声が出るほどの急変だった。声が出た後、しめつけられるような思いがしたのはなぜだろう。

とうとうあの亀たちもどこかに移っていったのだ。鯉の場合とはちがって亀たちの現在の境遇は見当がつかないが、ともかくも池から離れたのだ。

以前、主に聞いたところによると、約半世紀前にこの辺が宅地開発されるずっと以前、まだこの辺が山の斜面そのものであったところに道場は建てられたのだという。すると池も七、八十年前前に造られたのだろうか。その歴史が突然昨日閉じてしまった。もちろん歴史には人がかかわっている。池を造り、水を引きこみ、鯉を飼いはじめた人々のさかんな時や老病死などがともなっている。仏教の道場だったのだからなおさら、無常の感が深いというべきか。

ところが、池の亀にはもう一度出会ったのだった。

翌朝、私はやはり犬を連れて池ではなくなった池跡を眺めながら通った。昨日が土曜日だったせいかな、重機は昨日のままの位置にあり、埋め立てのようすも変わっていないようだ。

ゆるい、谷川に沿って曲がる坂道をさらに登っていくと、やがて左右の家並が尽きて森に到る。さらに百メートルばかり進むと谷にかかった小橋がある。コンクリート製の木橋のよそおいに作って、楓などの多い周囲の景色と溶け合っている。橋を渡っていくのだが、渡らずにさらに谷沿いを上っていく細道もある。橋のたもとで犬がなにかを嗅ぎつけ、その細道のほうに行こうとしてリードを引っ張った。そして吠えた。黒いものがそこにいた。亀だった。生きているのか死んでいるのかと、犬を制しながら近寄ると、こちらに向けた首が動いている。そこに赤い筋が見えた。まぎれもなく道場の池のアカミミガメだった。どうして？ どうしたのか？

すぐ、推測まじりの一つのストーリーが浮かんだ。道場の主が昨日か一昨日、この細道の上の方にある谷川の小さな支流にこの亀を放したのではないか。谷川の主流のほうが水は豊かだが、水面まで下りる崖がかなり急なので支流のほうに放した。二匹とも放したのか？ それともクサガメのほうはどこかにもらわれていったが、このアカミミガメは渡来種なので引き取り手がなく、しかたなくそこに捨てたのかもしれない。それにしてもなぜこの亀は今ここに？ 長い時間をかけて細道をゆっくり下ってきたとしか考えられない。こちらのほうに進もうとしているらしいのは？ 「帰巢本能」という言葉が浮かんだ。亀という動物にそれがあるのかどうかは知らない。でもウミガメは、自分が孵化した砂浜に成長してから帰ってくるというのではないか。この亀もその本能で道場の池を指して、今ゆっくりだが歩いているのではないか。

人の足では三、四分でも、遅足の亀にはいかにも遠すぎる距離だ。そして池はもうないのだ。亀はそのことを知らない。

どうするか？ 放しておく？ しかし池はもうない。

私は両手でそっと亀の甲羅をつかんで持ち上げた。亀は首を引っ込めた。甲羅の平らな裏側は一面オレンジ色であることを初めて知った。黒光りする頭、あざやかな赤筋、甲羅に引っ込めかげんのごつごつした固い皮膚の灰色の足。爬虫類が甲羅を着こんだようなくあいだが、でも海岸のヤドカリなどはちがって、甲羅も身体の一部なのだ。見続けていると、人間などとはおよそかけはなれた生き物だと思えてくる。勝手なことを言えば、異様だ、グロテスクな代物だ。しかも人類などよりはとてつもなく長い時代を生きてきた。

持ち重りがした。片手ではずしりと感じた。この亀の命の重さであり、またこの種が経てきた途方もない歴史の時間の重みでもあった。

あれこれ思い、あたりを見まわしてみても、生き続けられるかどうかかわからないが、すぐ下の谷川に放してやるしかない。「水」は合うはずだ。池の水はこの谷川から引いていたわけだから。私はなお亀に興味を示す犬を橋の欄干につなぎ、亀を片手に持って、木の幹につかまりながら谷の崖を下った。溪流がザアザア流れ、落差のある所では泡立っている。川の端っこにできている水溜りに亀を放してやった。水の中に入ると亀は驚いたようにすぐに

首と足を伸ばし、泳ごうとした。そこから三メートルばかりさかのぼれば小滝があつて滝つぼがやや深い池をなしている。でも滝つぼだから水は洗濯槽の中でのようにぐるぐる回っている。一方下流に向かえば橋の下のコンクリートの上を過ぎるとまた自然の谷川だ。今下りてきた崖は急勾配で上れそうもないから、この亀は一か八か、どちらかの流れに進んでみるしかない。

生物は単純で、生きてるか死ぬかだ。生きている間は生き、死ねばもろの元素に戻る。人間存在は人生とか社会とか、もつと複雑なようだが、勝手に複雑だと思ひこんでいるだけで、その基本は厳然と変わらない。

十分ばかり森の中を巡って橋のところに戻ってくると、もう放した場所にもその近くにも亀の姿は見えなかった。

かいこうず 海紅豆ふたたび

朝起きると頭に、痛むほどではないが不快なしびれがあつた。昨夜居酒屋で久しぶりに会った旧友と飲み過ぎたらしい。それでも今日は出かけなければならぬ。矢崎は朝食をとり、犬の散歩をすませ、シャワーを浴びてから外出の支度にかかった。それでもまだ迷っていた。今日は車の高齢者講習を受けに人工島にある自動車教習所に出かけるわけだが、その教習所まで、バスとライナーを乗り継いで行くか、それとも自分の車で行くか。運動になるのは前者だが、だいぶ早く自宅を出る必要がある。「まだ決めてないの？」と妻に呆れられながらなおぐずぐずしているうちに時が過ぎて、結局自分の車で行くことになった。梅雨の合間のきれいに晴れ上がった日で、高く昇った日差しに車庫の車はもう焼けはじめていた。今日はだいぶ気温が上がりそうだ。

人工島は、矢崎の住む高台からは常に視野のうちにあつてさほど遠くはない。二十分足らずで着けるだろうというつもりで車に乗ったが、車のナビゲーションの女声は、「約二十五分かかります」と告げる。少し差がある。ささいなことだが、その五分余りの時間差が矢崎は気になった。ナビの機械的な声の裏側から、ほら、おまえの脳の判断はいくらか狂っているぞ、と何者かに冷ややかに突きつけられたような気がした。このごろは日常のいろいろな判断にあまり自信がない。

いくつもの赤信号に遮られながら、山の中腹から海のほうへと下り、大型トラックの疾駆

する橋を渡って人工島に入った。四角を少し変形させたようなかたちの六平方キロほどの平らな島は、周囲に貨物船の着くバースを構え、海近くに工場や物流関係の会社が並んでいる。そして大型トラックが走る太い道路がその四周をめぐるっている。それらに囲われた内側のエリアに中高層のマンションやホテルや店舗や公共施設、文化施設などが散在して、前にネットの記事で読んだのだが、二万人ほどが暮らしているらしい。自動車教習所はマンション群と物流の道路の間にあった。南北を倉庫会社にはさまれていた。

前に電話で教習所の北側に駐車場があると聞いていたので探したが、一度は通り過ぎてしまい、Uターンしてちょうど到着した教習所のバスの後ろについて入ってみると車が数台駐まっていた。南側にフェンスに囲われて昔に変わらない感じで教習コースの空間が広がり、教習中の数台がゆっくり動いている。大きな看板に「高齢者講習の方はこちらに」と書かれていたので、その指示する建物の中に入っていくと、スタッフらしき中年の男に、「なんですか？」とげげんな顔をされた。高齢者講習に来たのだと告げると、今日はその予定はないがと即座に言われる。いや、先日たしかにここに電話して今日だと聞いた、と矢崎は案内のハガキを見せた。男はハガキを手に取り、事務机に行つてなにかの書類を繰ったが、やはり矢崎の名前はないのだという。矢崎は自分の電話の記憶には自信があったので、いや、たしかに、事務の女性からこの日時を聞いたとさらに弁じたが、「たしかにこの教習所に申し込んだのですか？」と問われて、少し自信が揺らいだ。

ハガキには小さな文字で教習所のリストを記してあるが、この人工島には西部にもう一カ所自動車教習所がある。二つの教習所の名前はリストの上下の欄に隣り合い、その電話番号のどちらにも自分でマークしていた。それを見て、もう一つの教習所のほうではないのか、と男に言われると、そうかもしれない、ずっとここに申し込んだつもりでいたが、と思えてきた。「電話して確認してみたら？」。そうしてみると言つて、駐車場の自分の車に戻り、運転席に坐つてバッグの中を探ってみるが持つてきたつもりスマートフォンのない。忘れないようにと下駄箱の上に置いたのをそのまま忘れてきてしまったようだ。ミスが重なつて少しへこんだ。朝から動くことにミスをしている。うかつだ。認めたくないが、いよいよ脳がおかしくなってきたのか。自分と世の中との関係が空気のようにではなく、見えない壁があつてざらざらしている。

でもまあ今はそんな抽象的なことにこだわっている時ではない。どうしようか、こうなつたらやっぱり西のほうの教習所へ直接行つてみるべきだろう。もしそこに申し込んだのなら、開始時刻がもう迫っている。と、矢崎が車を出そうとしていると、さっきの男が建物から出てきて車をのぞきこみ、「どうですか？ 通じましたか？」と訊く。いや、携帯を忘れてきたみたいで、と自分の顔がいくらかが歪んでいるのを意識しながら矢崎が言う、男はそれならと自分のスマホを取り出してハガキの番号にかけてくれた。でも話し中だった。直接行つてみますよ、と矢崎は、親切な男に礼を言った。この男には認知症状を疑われている

だろうなと思いつながら。

車のナビゲーションを入れ直すと、西のほうの教習所までは五分ほどだという。案内の声に導かれながら、そこまではスムーズに行けた。たしかに北側にあった駐車場に車を停めると、同じ年格好の男が一人門を入っていくところだった。どうやらここでは今から高齢者講習が始まるようだ。

二階が上がって事務室の制服の女性に、高齢者講習に来たのだが自分の名前はるかた矢崎はまず訊いた。妙な質問だったのだろう、若い事務員はちよつと笑い、すぐ机上の資料をたしかめ、「矢崎道夫さんですね。はい、たしかにありますよ」。矢崎は安堵した反面、これで自分がうかつにも二つの教習所を取り違えてしまったということが確定してしまったわけだがつかりもした。時計を見ると五分ばかりの遅刻だったが問題はなさそうだ。示された書類に氏名や生年月日を書かされたが、今日の日付の数字を間違えたうえにひどい悪筆になった。字もこのごろはいっそうますます乱雑になってきている。携帯番号記入のところではちよつとつまった。

「始まるまでまだ間があるので、そちらのほうでお待ちください」と示されたほうには、椅子やソファが置かれたロビーに同じ講習を受けに来たらしい人々がばらばらと坐り、たいていはスマホをいじっていた。学科か実習かの時間待ちなのだろう、髪の色がとりどりの若者たちも少数混じっていた。

大きな窓から教習所のコースが見渡せた。車が数台、のろのろと動いている。そして車はだんだんと中央に集まってきた。やがてチャイムが鳴って、女性の自動音声で、「教習、お疲れさまでした」というアナウンスが流れた。コースではたいていは学生らしい若い男女が運転席から降りて、後部座席の私物を取り、指導員にあいさつして別れていく。ここでは一時間が単位で、五十分が学科や実習、十分が移動や休み時間に宛てられているようだ。矢崎が免許をとったころの昔の自動車教習所はもつと人であふれ、掲示板を見ながら授業に入りこむのが競争のようだった記憶があるが、このごろはネット予約ですべてが進行しているためか、コースも待合所内もいたって静かだ。それともこの教習所があまりはやっていないだけだろうか。

そのうちに制服の指導員が来て、高齢者講習の開始を告げた。老人たちが立ち、指導員についてぞろぞろ一階まで下りてあまり広くはない教室に入った。机を前に坐ると受講者は十人ほどだとわかった。女が一人だけであとは男。そしてほとんどが矢崎と同じく初めて高齢者講習を受けるのだった。初めにまた書類に住所、氏名を書かされた。二グループに分かれて二人の指導員が五人ずつ担当する、視力検査と実車講習とを二グループが交代して行うという説明があった。高齢者が相手だからか、それともそんな時代なのか、中年の男の指導員の言葉遣いや態度はひどく丁寧で、銀行のように「様」をつけて受講者の名前を呼んだ。

矢崎は初めに視力検査のほうを受けた。教室の壁際に並んだ機械で、動体視力や夜間視力、

視野の広狭などを計った。機械は自動で、大病院の待合に置いてある血圧測定機の機軸のように終わるとすぐに結果がプリントされて出てきた。ほどなくそれは終わった。実車講習のほうは指導員が一人ずつ呼びだし、教室内のコースで助手席に乗って指導している。だから時間がかかるようだ。教室の前のモニターには高齢者の起こした事故や安全運転の心得などのビデオが流れていた。それも講習内容の一部らしいが、くり返し流れるので、一度見ると矢崎は飽きてしまい、外に出てみたりした。強い日差しの中で実習車が動いていたが、やはり無声の映画を見ているように静かだった。

名が呼ばれて実車講習に移った。助手席の指導員の指示通りに車を動かす。ふつうの運転で、しかもゆっくり狭いコース内を動くだけだからなんの困難もないはずだが、なんだか少し勝手がちがった。次々に出る指導員の指示に注意しすぎてかえって運転に集中できない感じだ。結局七、八分何度かコースを周回して初めの場所に止まったが、一時停止を二回見落とし「しまったね」と指導員に指摘された。矢崎はその自覚がまるでなかったのが驚いた。どうやら、自分の目は路面と近くの他車の状況ばかり気にしていたので交通標識を見落とししてしまったのだ。ふだんも大概は決まりきった道ばかり走っているので、標識をあまり注意しないようになっていたらしい。しかしここは教室所であって、講習を受けている最中なのに、標識を見ないなんてことがあるものか。うかつさはここでもかと、矢崎はまた自分の頭のぐあいには落胆せざるをえなかった。運転途中、指導員が急に運転とは関係のない世間話のようなことを口にしたが、それも注意散漫になりやすい状況を意図的に作るためで、自分はやすやすとそれにひっかかってしまったらしかった。

教室に戻ると、あとは同じような内容のビデオを見せられながら他のメンバーの実車講習が終わるのを待ただけだった。他の人々も退屈そうにしている。たまたまここに集ったゆかりもない人々だが、みな同じ時代を生きてきたわけだと思ふとふしぎな感じがしないでもない。昔、同じころに赤ちゃんで生まれ、同じ時代を別の場所でそれぞれの人生を過ごしてきた、そしてたまたま学校の生徒のようにここに同席している。みな七十歳を越え、老いたびれた風采なわけだ。

「他者に共感する」ということが矢崎の最近の生きる上でのテーマの一つだった。長年を過ごして、他者を容易に理解できないことはもういやというほどわかっている。不幸に遭った人々のニュースを聞いて表面的な同情をしても、では自分の財産の十分の一でもその人々に提供できるのかといえはできないのだ。人は徹頭徹尾我欲に徹して生きていくだけの存在にすぎないのではないか。現に自分は結局昔も今も、他人を顧慮することなく自分や自分の家族のためだけに生きてきってしまったようだ。しかしそれだけでは人生、あまりに寂しいではないか。生老病死というが、そろそろ老と病に苦しめられつつ、墓石の下に入る時も近づいてきた今、せめて他者の人生にも温かく共感しつつ生きるような生き方ができないものか、などと、淡く単調な老いの暮らしの中で矢崎は考えるのだ。退屈にまかせ

て、「共感」をもってこの隣人たちを眺められるかどうか、などと場違いな思いで、矢崎はあたりの席を眺めた。

最後に指導員から運転上の二、三の注意喚起があった後、一人一人に高齢者講習の終了証明書が手渡された。次の免許更新時にはこの証明書を持参する。

解き放たれた老人たちは、多くがばらばらと矢崎と同じように駐車場に向かった。なんとかことを終え、やや落ち着いた気分では自分の車まで歩きながら、矢崎は前方の風景に見覚えがあるのにやっと気づいた。道路の向こう側、斜め前の銀色の大きな箱のようなビル、あれは菱川運送の建物ではないか。すると……と矢崎はあらためてあたりを見回した。記憶がよみがえってきた。

数年前に退職して一年ほどはぶらぶらしていたが、これでは心身がなまっていくばかりだと自覚してアルバイトをしてみようと決めた。長年勤めたデスクワークよりは、適度に身体を動かす仕事をという調べてみたが、人員の不足している物流関係の会社に求人が多かった。そこで二、三の会社にあたってみると、採用してくれたのが人工島にある菱川運送だった。高齢でも身体が元氣ならかまわないが、就職前にフォークリフトの資格は取っておいてほしいと言われたので、隣の市にある教習所に数日通い、実技講習も受けて技能講習の修了証というのを得た。そして会社に勤め始めた。初めのうちは不慣れなフォークリフトの作業に手間取り、誤操作をしてたびたび大小の失敗をやらかしたが、二カ月ほど勤めるうちにはなんとかさまになってきた。同僚には気のいい若者が多く、ほかに矢崎のような再就職組の老人もいた。棚卸の時にはかつての知識を生かしてきばきとやり、担当の若い正社員にほめられた。仕事の後、缶詰や菓子や飲料など廃棄処分になった食品を多少同僚と分けて持ち帰ることができたのもおもしろかった。だが巨大な倉庫でのフォークリフトを使っての荷積み、荷下ろしは思っていた以上に重労働だった。リフトの運転ばかりではなく、重い荷物を自分の手で持ち運びもするのだ。若い同僚たちはいたわってくれたが、矢崎はどうとう腰や肩を痛めてしまい、結局半年間ほどしかもたなかった。

たしかに当時、会社の近くには、あまり気にも留めなかったが自動車教習所があったと思いついた。今朝は慌てていたのでその教習所だったと気づかなかつたらしい。矢崎は歩道をその会社の車の出入り口が見えるところまで歩いてみた。烈しい日差しを跳ね返している四角い建物をややなつかしく眺めた。その暑苦しい倉庫の中で、今もあの当時の連中が働いているだろうか、いや人の出入りの激しい業界だからもう幾人も残っていないだろう。

自分の車に戻ると矢崎は車を西へ、そして道端に大型トラックが停まっている広い道路を南へと走らせた。運送会社の建物のせいで過去へと少し引き戻され、そしてともかくも今日の仕事は果たしたという安堵の中で、ちよつと立ち寄りたい場所が浮かんできた。炎が噴き出たような赤い花、あれをまた見てみたい、ここから遠くないはず、ちよつと今ごろの季節だったはずだ。

人工島の南側の一部は海に面する公園になっている。その隣の一面に珍しくも自然らしく池をしつらえた野鳥園がある。矢崎はその近くの有料駐車場に車を入れ、以前の記憶のままに遊歩道を歩いた。見覚えのある鳥形をした公衆トイレがあった。まもなくグラウンドのそばの公園が見えてきた。期待通り、そこに深紅の炎が噴き出していた。海紅豆かいこうずの花だ。矢崎は近寄り、まじまじと見て花に顔を寄せた。まばらに植えられた若木たちは、四年前よりもたしかに成長したようで、今はみごとな炎の饗宴だった。

四年前の今ごろ、一度ここに来たことがあるのだ。その時は当時四歳で小さかった孫娘のユズがいっしょだった。たしか娘が二歳の息子をこの人工島の病院に検診に連れて行くので、検診が終わるまでの間をユズとすこしに車でこの辺まで来て、たまたま野鳥園をのぞいた後でこの公園まで歩いてきたのだった。やはり今日のように光の激しい日で、矢崎が退職してまだ間もないころだった。年老いたにしても、まだ大きな暮らし方の変化が新鮮だった時期だったからだろうか、炎の噴き出たような深紅の花は強い印象を残し、その後も折にふれて思い出した。ユズは海紅豆の花をちよつとつまんだり、木と木の間を走り回ったりしていた。そのころ幼稚園に通っていたユズは、もうずいぶん手足も背丈も伸びて今は小学校に通っている。矢崎のほうは衰えを意識しつつ、ほとんど無為の生活に慣れきってしまった。

やはり見に来てよかった、と思った。たくましい命がここにはあふれている。

道に戻って、海のそばの公園に出た。まばらに人がいた。ユズとはここも歩いた。抱っこしても歩いた。隔ての柵に寄って見下ろすと、土を混ぜたような色の海水がゆっくり動いている。